T.T

創立十周年特集号

清心創立十周年特集号

目　次

創立十周年の挨拶

毛利晴一

当会は営利を目的でやっているものではありません。さりとて興味本位でこんなことをしているのでもありません。はつきりと会の創立趣意書にある様な目的をもつて真面目な気持ちでやっているのです。そしてこの八月末で丸十ケ年間も続けて来た訳です。世間はどんなにうまく説明して見たところで決して真面目な集団だと理解しようとしないのです。

でも同じ場所で同じ人間が同じ目的を掲げてこうして十年間もやつて来た事実に対しては第三者がなんと批判しようと私は誇りに思つております。然し乍らこうした実にまじめにこつこつと永い間努力して来たに不拘効果そのものは決して香しくありません。それに悩み乍らそれだから本会の必要性があるのだと私は自分にむちを打ち乍らこうして続け、そして将来もつづけて行く覚悟であります。誠におこがましい事を申上げる様ですが、現代の社会情勢を見るに人心いたずらにすさみ、日本の経済成長とは裏腹に益々心の貧しさを増している様に私はしみじみ感じております。この際に当つて本会が同性愛の集団と言う枠の中より一歩前進して、この集団こそ最も心の豊かな人の集りだと言われる迄にお互いに話し合い協力して前進して行き度いと考えております。勿論私如き者の一人の力ではどうなるものでもありません。お互いは長所も短所も知り尽しております。そして社会生活をする上で一番ネックになつている点も判つている筈であります。だからこの集団が一番大切な心の拠りどころとして今後の進歩の基礎となることを念じて創立十周年の挨拶と致します。

終りに全国の同好者の幸運をお祈り致します。そして年内に記念会を開催致し度いと考えておりますので、その節は御参加下さいます様に豫じめお願い申上げております。

山に逝きし君へ

福岡　二四二二生

この山の何処かに
まだ君がいそうな気がして
僕はひとり逢いにきたんだ
林の道も湖も遠い山脈も
あの日と少しも変らない
君が口づけて飲んだ谷川のせゝらぎに
そつと口づけたら
君の熱く甘い舌の感触が
口中に甦つてきて
僕の心をせつなくさせたよ
僕がこんな気持でいるのに
君は何処へ行つてしまつたの
あの幹の向こうにあの岩蔭に隠れているのなら
何時もしたようにそつと出てきて
僕の後ろから目隠しをしておくれ
その手をとり僕は君を強く抱きしめるだろう
ねて甘えたあの日の顔を
僕の胸にすがつて泣いたあの夜の顔を
今一度僕に見せておくれ
あゝ　梢の上に星が光つたよ
あの一番星は君の可愛いつぶらな瞳か
やるせなくなつて
谷間に君の名前を呼んだけど
戻つてくるのはこだまだけ
今夜はせめて
君が眠むるこの山の懐に抱かれて
ひとりテントに夜を明かそう
だから君よ
今夜見る僕の夢にきつと現われておくれ
熱いベーゼのあとに
つもり話しを
心ゆくまでしようではないか

雨の日の追慕

君のいない街に雨が降る
あの日と同じように

君と初めて会つた日僕たちは
傘もさゝずに何処までも
カロリナポプラ並木路を
雨に濡れながら歩いたつけ
触れあつた肩の温もりが
握りあつた手の温もりが
雨の雫の冷たさを忘れさせたつけ

夜になつて僕たちは
行きずりの旅館の一室で
雨の音を聞きながら
互いの愛を確めあつたつけ

あれから一年
君がくれた形身のペンダントは
なくしてしまつたけど
君が噛んだ肩の痛みが微かに甦える時
僕の胸にすがつて泣いた
君の白い裸身が目に浮かぶ

しとしとと何時までも
僕の心を濡らすように降る雨
この雨の音を君は何処で聞いているだろか—

君のいない街に雨が降る
あの日と同じように

あいつ

恰好いゝと言つたら
気取つてポーズをとつたあいつ

ハンサムだと言つたら
ウンとうなづいて澄ましたあいつ

いゝ体してると言つたら
腕の力こぶをつくつて見せたあいつ

好きだと言つたら
ニッと笑つて僕を見つめたあいつ

だけど
ふざけ半分に抱きついたら
気持悪がつて逃げてつたつけ

お前があれば

お前があれば
朝の目覚めも快いだろうに

お前があれば
人の笑い声も楽しく聞こえるだろうに

お前があれば
仕事の辛さも苦にはならないだろうに

お前があれば
夜の寂しさもさして怖くはないだろうに

お前があれば
死ぬことなんか考えてもみないだろうに

お前があれば
お前があれば

通信二題

毛利生

御忙しい処さつそく御送本下さいましてありがとうございました。大変楽しく読ませてもらつております。貴会の方達が自由に自分達の世界を楽しんでおられるのを読んで何か胸が高鳴ると同時に大変美しく思いました。僕にもこんな兄さんや友達がいたらどれ程すばらしい事かと思つています。

しかし不思議な事ですが僕自身の内には二つの魂が宿つているかの様にこの世界この楽しみを素直にそのまゝ受け入れる事はどうしてもできないのです。一面では僕と同年位いの若い青年達と精神的にも肉体的にも深く結ばれたいと願つているのにその不潔感、反社会的行動感そして不成就性等々その心を強く押えつけてしまう色々の思いが次々に現われてくるのです。と同時に半ば僕の性格からか僕の今の立場からかそういう頭の中がどうも処理しきれなくなつてしまうのです。私は現在浪人中です。勉強は第一義の事ですが勿論これを怠たる事なく僕の求める青年とこの一年は精神的にだけ付合つて行ける同年輩位いの青年もしくは学生がほしいのです。勿論これは非常に身勝手な事であると思います。でも若し色々話し合つて僕の気持を理解して下さる方がおられましたら僕は交際して行き度いと思うのです。貴会発行の同好の中の内容が十分に理解しきれない処も有る程この世界は無知なのですし、又肉体経験は一度もありません。だからそれだけいつそう望みも大きくなり不安も強い様に感じられます。兄弟は二人（兄）がいるし親友もいます（三人）でも何か満たされないのです。僕は分つていま す。これが何であるか、それは若い青年の肉体です。しかも充実した精神力と逞しさを持つた。ゆつくり考えてみて今の僕にとつては肉体をも許し合える仲間は一体僕の何になるのだろう単なる自己欲望の満足を求めているだけではないのだろうか、そう考えて来るとそんな精神性を持つた自分がたまらなくいやになります。

一方では強く求めて一方では激しく拒否する一見非常に矛盾している様で実の処やはりある一線で接しているのだと思います。貴会の会員の方達特に若い会員の入会するしないは別にして話し合つてみたいと思うのですがどうでしようか、その上で自分で納得がいつたら改めて入会したく思います。その意味で一度貴会を訪問したい

と思います。中略　何れにしても一度そんな多勢の同好の方々と一日も早く話しがしてみたいのです。そして僕自身を見つけたいと思います。どうかその折にはよろしく願います。それでもいつたいどんな所だろう、ほんとうにだいじようぶだろうかと心配です。これを決心するのに大変な勇気がいりました。しかしこれを行動するにはもつと勇気がいりそうです。そして僕をしてこれ程までに勇気を湧かせそれをさせようとする力はいつたいなになのでしようか？　略

以上は未入会の一学生よりの便りです。

雨のふり続く毎日です。うつとおしい天気ですが私の心もうつとおしい毎日です。私も同性に興味を感じる者の一人です。いたたまれない気持から貴会に筆を執りました。自分の気持ちを押えつける程欲望が大きくなり恥も外聞もない文章になることをお許し下さい。

私は二十四才で一米七三、六二瓩の健康な身体ですが高校の頃から同性に興味を持ちはじめいろいろ本を読み調べました。フロイドの成熟への一過程と言うことを信じていたのですが今になつてもこの傾向は直らず悩み苦しみましたが、ある雑誌にて貴会のあることを知り、もしかしたら私の悩みもわかつてくれるのではないかと期待を持つて筆を執つたしだいです。私も身体は一人前のの男性として成人しました。性力もたぶん一人前だと思つています。が同性に対してしかも裸を見ると興奮してしまいます。そういう気持をいつも押えて来ました。でも夜ふとんの中に入ると目の前に男の身体が浮んできます。顔はわからないのですが男の身体が迫つて来る。夢のようですがそうかといつて寝ているでもなし、とても困つてしまいます。私は男の身体にさかつてみたいし、自分も身体をさわつてもらいたい。そして抱いてもらいたい。他人のシンボルから白い液の出るのがみたいし私の身体の中に注ぎこまれてみたい、連想はつぎからつぎへと続いていきます。でも私は反面ではこわいのです。社会の異端者になるようでこわいのです。だからこれをうち破りたい気もします。私の気を落ち着かせることがあります様に期待しております。　以下略

これも未入会の一青年よりの便りです。

右の二通に対して考えられることは二人共に同性愛的

な素質を持つており乍らこれにはいり切れずに悩んでいるのですが、この場合に言える事は例え異性愛の場合でもこの年頃の人間は一人でもんもんとして悩んでいます。それは同じと致しましても同性愛が反社会的だとか罪悪視してこの事に深く考え過ぎるのではないかと思います。どんなにうまく理論づけ様と同性愛はやはり倒錯性と言おうか裏の道には間違いはないと思います。ですから興味本位だとか粋興や道楽でこんな道へいるのならこれは止めた方がいいと私は思います。然し私共の会員の方々はそんなのではなく生れつきの体質的な同性愛者であつて決して一時的なものではありません。言わばこうした病気を背負つて生れて来た訳でありまして、然もそれが不治としたらそれはそれなりに最善の方法で生きる道を求めねばなりません。幸い身体の不具者と違つて外見的には常人と全然違わないのですから、自分より変な行動を取つたり他人に話さなければわからない訳ですから、それ程にびくびくするに当らないと思います。ましてセツクスは異性愛でも同性愛の場合でも人前で為すことではありませんから尚更にそれ程に深く考え過ぎる事はないでしよう。勿論自分のそれであることは秘密にしておくべきでしようけれ共、結論は他人に迷惑をかけたり法律に触れたりする様な事を絶対しなければそれでいいのではないでしようか。生れながらのものでありますからそれはそれとして最善の方法で強く正しい社会生活をする様に心がく可きでしよう。前二者の文面に依りますとこの問題を余りにも深く考え過ぎてその為に悩み、社会生活にも影をおとしている様に思います。この問題は一人で考えれば考える程深みに落ち入る様に思います。多勢の同好者と明るく話し合つてみると、なんだそんなに悩まねばならぬ程の大した問題でもないのじやないかと考える様になると思います。

N君への便り

（大阪　K・E生）

N君、お便りありがとう。きよう会に所属している友人と、君のご意見について語り合いました。君のいうように「相手を求めて、そしてねるだけということにあき足らぬ、あるいはそうはできぬという人達で、今の中にもつと人間的な新らしい集まりを作るか、そういう雰気を今の会の中にひろげるということ」は何とすばらしいことだろう。君は書いていたね、「お互いが人間として精一パイ関わり合つて生きていくということが、いかに大切かということを私は知つています」と。私は君のような若者がこのようなマジメな考えをもつて、この会に所属し、よい影響を与えているということにたのもしさを覚えた。「最近の若い者は……」などと、一様に若者の怠惰を非難し、無気力を責める声が多く、また、現実肯定の生活にきゆうきゆうとしてしまつて何らの理想もなく、向上心のカケラもないような若者が目にあまる昨今だとはいえ、わが同好会には君のような心ある若者がおつたということを私は友人と共に心から喜こんだのだ。しかし、君もいうように、この会に属する大部分の人が、意識すると否とにかゝわらず、いわゆる動物的なつながりのみを追つているのではないか、と思われるような傾向を全く否定し去ることはできない。君と共に私も私の友人もこれを本当に残念に思つている。

けれども、たしかに、君のいうように、それでは実際には如何したら、われわれの会が理想的なものになるのか、と問われた時、私はハタと当惑せざるを得ない。今や通算二七〇〇番にも及ぶ会員のうち何十パーセントが今もなお仲間であるのかわからないが、そのうち半分を占める地方在住の仲間、そして残りの半分を占める京阪神地区の仲間のすべてが満足し、すべてが共鳴してくれるどんな理想やアイデアがあるというのだろう。またアイデアだけでもだめだ。まこと「言うは易く、行なうは難し」である。ネコの首に鈴をつけるのはむずかしい限りというべきだろう。私も友人といろいろ考えてみた。

まず地方の会員については、隔月の会誌が唯一の依りどころであるのだから、会誌内容の充実を図り、バラエティに富んだ楽しいしかも実利性のあるものにすること。実利性というのは、会員だよりの欄を拡充して、そこを求友欄にすること。大阪まで来る時間を持てぬ会員も、

比較的近隣の仲間と文通したり、交流したりできるように、積極的に求友の投書をしたらよいと思う。大阪近辺に在住の仲間のためには、月一回でもよいから日を決めて、て、事務局で安い食費で「お茶とお菓子で語る会」を持つたらどうだろう。勿論、アルコールだつて希望者は別に費用を払えばお飲みになるのもよいだろう。とに角、日頃の事務局の静かすぎる雰囲気を一転せしめるべく「語る」という目的をもつてみんなが集まるのは面白いのではないだろうか。毛利会長の体験談や十年間の会の歴史をお話しねがうのもいいだろう。会を重ねるごとに心が融け合つてだんだん冗談もでてくるだろうし、会員各自の想い出話に花が咲くかも知れん。月一回のこの集りが一つのコア（核）になつて、連鎖的に明るいくつたくのない雰囲気が事務局を満たすようになれば、現会員も、楽しい語らいの場として、今までより一そうたびたび事務局を訪れるだろうし、新らしく入会する仲間も自然に増えていくだろう。その暁には仲間意識が会にあふれ、いまのように、カップルになるともう会に寄りつかぬという傾向もなくなり、会員たちも、カップルはそのまゝ暖い目で見まもりつつ、今までと変らぬ仲間づき合いをしていくようになるだろう。やれ、浮気されたの、恋人をとつたのとられたの、といつた下世話のトラブルは、もうわれわれの会にはなくなる。あくまで個人の意志、お互いの気持を重視したオトナの集まりということになるだろう。

たいへんユートピアのような話になりましたね。空想的になりました。あくまで理想の域にふみとどまらねばなりません。

たしかに、現在の事務局のあり方でも、君のいうように「一人のさびしい少年を、あるやさしい青年が包むこともあるでしょう」し、また「傷ついた者同志がなぐさめ合うことも」ある。しかし「理想的な相手をみつけたその時、彼らにはもはやこの会は存在しないのです。それはとりもなおさずこの会にこれ以上のものがないという証明になる訳です。」という君のことばは、必らずしも全面的に肯定する気にはなれぬ。私の知つている友人の中にだつて、現に理想の人を得ておりながら、あくまで会の本当の趣旨に賛成して会を去らず、時おり会長のところへダベリに来る者があるし、会の中で友人を得てもなお、二人で会へ顔を出したり、会で待ち合わせをしたりしているカップルだつてある。要は当人たちの意志次第というところだが、われわれの方もカップルには余

計な口出しをせんようにし、善意の無関心で対するとともに、この会の趣旨をよく理解し、仮りにもこの会の存在価値は理想の相手を得るためだけのものだ」、といった考えを捨て去るよう努力していかねばならぬ。

われわれの中だけでも、そしてあの事務局へ一歩足を踏み入れたらもう「オレ達は社会の意端者なんだ・・・」などという湿つた考えを払拭しようではないか。われわれが「語り合う」ということは決して「弱い者が集まつてお互いの傷をなめ合う」ことでもないし、ましてや「高尚なマンハント専門の場であつたり」することでもない。むしろ現在の事務局の雰囲気の方が、高尚な(?)マンハント専門の場という感じがするのではなかろうか。いや、「これは一言多かつた」かも知れない。「一つの共同体には非常に魅力的な中心人物か、会員の支持する強烈なビジョンが必要だ」という君の意見は全くその通りである。私は毛利会長こそその魅力的な中心人物であり、全員その支持するビジョンは本会の趣旨と、これから君や私たちが考え実行していこうとする試みのうちに、内蔵されているのではあるまいかと思つている。

N君、君の熱意あるお手紙に応ずるにはあまりに内容のないお返事だつたかも知れない。しかし、私は君たち若者の良識と実行力に期待する。ゼヒ一度機会を得てジックリ語り合いものだ。時節柄からだに気をつけられんことを。

では又　さよなら

昭和四十三年十月十日　K・Eより

S・N君へ

求む相手のスポンサーに

事務局

会費納入状態が悪いので会誌発行に支障を来しますので風奇誌の読者交歓欄にヒントを得ましてスポンサー制度を取る事に致しました。今回の会誌に掲載されている程度の内容で、一回につき二百字以内で一口金壱千円也ですから精々御協力の程お願い申上げます。そして今後は二ケ月に一回は必ず会誌を発行する予定です。尚広告された会員に交際申込等がありました場合は、必ずお知らせ致します。

期待してお待ち下さい。

美少年

大阪　S・M生

晩秋の一夜つれづれなるまゝにいつもいきつけの喫茶店「園生」にはいつた。
ふと斜向いのボックスに一人でこちらを向いて座つている可愛いらしい少年がいた。一見小柄で丸坊主の様な頭で下ぶくれのした少年だつた。さて年令はまだ十六、七才位いかな、こんな喫茶店に一人で来ている少年にしては全然悪びれたところのない好感の持てる少年だつた。言葉でもかけて見たいがそんな事も出来ず、それにこゝのマスターとも親しくしているだけにそんな突飛なことも出来なかつた。その夜はたゞ遠くより観賞しているだけでコーヒーを呑み終り心を後に残して引揚げて来た。
それから数日後の午前十時頃に「園生」にはいつてみた。そして再びあの少年を見た。間もなくその少年が銀盆の上に水をのせて、私の前に立ちぴよこんと頭を下げてテーブルの上にコップを置いた。
「あんた手伝つて上げているの」
と声をかけた。そばからマスターが
「今日は女の子が出勤が遅いのでこの子が手伝つてくれてまんねん」
と説明した。
「そう、そら感心だねえ、あんた学生？」
「えゝ　大学一年生です」
「そうあんた大学生かね、若く見えるねえ、何才です」
「十八才です」
「どこの学校」
「えゝ、あまり良い学校じやないんです」
「でもこの節は大学入試は大変なんだから、ま、どこでもはいれたらいいわねえ」
と軽く受け流していた。
再びその少年がコーヒーを運んで来てくれた。
「ありがとう」
と私は軽く礼を言つた。彼はさも満足した様なふりをして奥の方へ下つていつた。
なかなか見かけだけでなく気立てもいゝ子だ、そしてなかば恥かしそうにそして気軽に手伝つてあげるあたり実に好感の持てる少年だつた。
その日もそれきりで後髪を引かれ乍ら喫茶店を出た。
それから数日後の夜の八時過ぎにその喫茶店に行つて見

るとまた例の少年が来ていた。

近頃こゝの馴染客になつた様に殆んど毎日の様に来ている様な口振りだつた。そんな訳でこの店の女店員二人とも仲良くなつていた。なかなかしつかりした気立ても顔立ちも短大生だつた。この女店員の一人はアルバイトのいゝ女の子で、他の一人は喫茶店を渡り歩いている様な可成りすれた感じの女の子で二人共に二十才位いに見えた。客も殆んどなくマスターを交えてその少年と四人で何んだか笑い乍ら話していた。ふとその短大でない女の子が

「松井さん　あんた同性愛と違うの、うちのマスターと出来ているんと違うか？」

と言つた。その少年（松井）は一寸と顔を赤らめてただちに

「まさか？」

と答えた。そしてマスターも口を出して

「そら週刊紙をあんまり読み過ぎや」

と言つて茶化しといた。少年はなんと思つたのか自分で次の様な事を言つた。

「僕は小さい時から女の子とばかり遊んでいた、そして遊ぶことゝ言つたら女の子のすることばかりだから、オジャミなんかうまいよ」

と平気で話していた。

側で聞いていて私は異様に感じた。その女の子の卒直な言い方。それにマスターの軽く受け流し方、そしてその松井少年の幼時の遊び事等の話し方。これ等を一体どう判断していゝのか突差に迷つた。でも同性愛と言う事を知つていると言う点だけでも私は何んかしらほつとした気がした。それからも時々その喫茶店でその松井少年と会つた。そして時には彼ののんだコーヒー代の八十円を支払つてやることもあつた。でも彼は礼を言うことを忘れなかつた。こうして私はこの少年と一歩一歩近づいていた。

十二月二十四日クリスマスイヴの日に私は高校二年の少年と心斎橋に出掛ける約束をしていた。でもその少年が学校からまだ帰つて来ないのでそれまでの時間待ちと思つて例の喫茶店にいつた。またそこに松井少年がいた。

「やあ久し振りだねえ、この頃どうしているの？」

と尋ねたら、松井少年は

「ずつと学校休みになつてからアルバイトに行つているんです」

「ふむ、どこへ」

「大丸百貨店です。毎日遅くまで、大変です」
「で今日はどうしたの」
「え丶今日は午後一時から出勤するつもりですが、一寸風邪を引いてしんどいので休もうかと考えているところです」
「じやどうかね、今日はクリスマスイヴだし休んで一緒に心斎橋へ出ない。もう一人一緒だけれ共どうかね」
と誘つた。彼は一寸考えるふりをしていたが
「え丶すみません」
と一緒に行くことに同意した。
こうして私は十六才の小林少年と十八才の松井少年をつれて三人で心斎橋筋へ遊びに出掛けた。二人は私に紹介されてすぐに親しくなり仲良く話し合つていた。
三人で富士屋食堂に這入つて、盛合せランチを注文してクリスマスのお祝いをした。
でもどこでも街は割合に静かだつた。十年程前のらんちきさわぎはどこにも見当らなかつた。却つて各家庭でクリスマスをするせいか、平常よりも静かな様にも見えた。
食事をおわり少し散歩したあとで、美松に這入つてコーヒーをのみ、そして道頓堀のホール・コンパで三人でボーリングをした。このボーリングはこの二人の少年より五十才代の私の方がずつと上手だつた。松井少年は不思議そうに私のプレイを見ていた。そのあとぶらぶらと当てもなく歩き廻つて夜の九時過ぎにかえつて来た。
「どうもありがとうございました」
「い丶え又私の家にも遊びにいらつしやい」
と言つてその夜は公園の信号の附近で別れた。
　松井少年は大晦日の夜までアルバイトをしてそして一月二日より友人とスキーに行くと話していた。そんな訳で彼とは其後しばらく会うこともなかつた。
一月七日の午後一時頃に小林少年と二人で難波へ映画を見に行こうと二人で住吉公園の中央道路を駅の方へ歩いていた。
ふと反対方向からやつて来た松井少年と会つた。彼はぴよこんと頭を下げて行き過ぎていつた。味気ない子だなあと私は心の中では思つたけれ共、口には出さなかつた。
それから二日後の正午過ぎに私はナンバ行のバスに乗ろうと思つて停留所に立つていた。そこへ住吉駅に向つて信号を渡ろうとしていた松井少年を見た。松井少年もすぐに気がついて態々私のそばにやつて来て、につこり笑つて
「今日は」

と挨拶するとつゞいて
「この間はどこへ行つて来ました」
と尋ねた。私はこの質問の中に松井少年の小林少年に対するゼラシーを感じた。
「うむ難波まで映画を見に行つて来たんだ。その中に又一緒に行きましようねえ、今日は学校か？」
と返事をした。松井少年はやゝ気分を柔げた様で
「さようなら」
と言い残してはしる様にして信号を渡つて行つた。私は心の中で一寸浮き浮きしたものを感じた。その中に彼と二人でどこかへ遊びに行き度いと一人で考えていた。それが意外にも早くぐうぜんにやつて来た。
それから二日後の午後三時頃に戎橋筋で一寸パチンコでもして見ようかと思つて高島屋を出て北へ向つて歩いていた。丁度五十米程行つたところで反対側から南へ向つて歩いて来る松井少年とぱつたり出会つた。
彼は私を見るなり
「今日は」
とうれしそうに近づいて来た。
「一人かい」
「はい一人でかえろうかと思つて」
「じや丁度いゝ二人でぶらぶら歩こうよ」
と言つて肩をかゝえる様にして反対の方向に再び歩きかけた。
「食事はすんだの」
「いえまだですけれ共かえつてから食べます」
「じやどこかで一緒にしよう、さて何がいゝかねえ」
「なんでもいゝです」
と遠慮勝ちに言つた。それから少し歩いて、Sレストランのボックスに向い合つて座つた。ほんとうに見れば見る程に可愛いらしいまるで仏様の様な顔立ちの少年だつた。彼は私に
「今日は小林はどうしてますの」
と聞いた。又小林少年の事を気にしているのだなあ、と私は心の中で思つた。そしてつゞいて
「小林は幸せだなあ」
と付け加えた。その時私はすぐに
「松井君、僕の家は小林と二人きりだから暇があつたら遠慮なしに遊びにお出でよ」
「えゝそうですか二人だけですか？」
と彼は不思議そうにそして念を押すように聞きたゞした。
「うむ、だから気楽だからいつでも遊びにお出でよ」

「えゝじや又よせてもらいます」
二人は食事をしながら出来るだけお互いの事をよく知ろうと色々と話し合つた。
「松井君ガールフレンドは？」
と聞いてみた。
「ありませんよ、面倒くさいしねえ、そして僕なんかお金もないしつきあえませんよ」
私はこの一言を非常に興味と好感を持つて聞いていた。
その日も心斎橋や道頓堀あたりをぶらぶらしてから二人は住吉までかえつてきた。
次の土曜日の夜おそく十一時頃に私は小林少年と例の喫茶「園生」に行つた。そこに又松井少年も居合せた。二人の顔を見ると今度は親し気に二人のそばにやつて来て話し出した。偶然一緒になつて三人で話し合つているとき、小林少年が最近習いかけている麻雀の話しをした。
丁度この松井少年も最近になつてやつと麻雀の並べ方を習つた程度だつた。うまく意気投合してそれから三人で私の家で麻雀をすることにした。松井少年は自宅へ電話をかけてその事を話して了解を得た。両少年は今習いかけで進行はおそいが大変楽しそうにパイを運んでいた。
丁度二回を終つて寝ることにした。小林少年のフトンはシングルで私のフトンはセミダブルだから松井少年を私の横に寝かせることにした。小林少年は同好者ではなく従つてホモの関係は全然ないので少しのゼラシーも感じていない様だつた。
おそくまで起きていたので少年達はフトンの中で横になるなり、グウグウといびきをかいて寝てしまつた。松井少年も背を向けて横になつて寝てしまつたような格好をしていたが寝息は乱れて次の何かを期待している様な・・・・感じがした。私もこの最も理想とする松井少年を横にねかせておいて平然と眠りにつく事は出来なかつた。いけないいけない自分で自分に聞かせ乍ら我慢していたが、つい手は下の方へと伸びて行つた。

夢ある山脈

東京都　二、五九三番

一、デート

僕が山田崇と逢つたのは、十一月も押し迫つた、二十四日の日曜日でした。国電千駄ガ谷駅前で、十時に逢う約束になつていました。

僕は、時間より三十分も早く指定の場所に行つて、彼を待つていました。山口とは、何回も文通して気心も分つていたし、写真も貰つていたので、まだ見ぬながら概念もおぼろ気ながら、分つていました。十時五分前頃でしたでしようか。僕は、不意に声を掛けられたのです。

「あなた、沢木さんでしよう。僕、山田です」

と若い声に打たれて―。

びつくりしてその方を見ると、写真より以上な好男子な青年が幾分はにかみながら立つていました。

「僕、沢木です。よく来て下さいました。」

と僕は挨拶しました。乗降客が大勢、自分達の傍を往来するのです。

「とに角、歩きましよう―。」

僕が促すと、山田は僕の袖を掴んで、

「ねえ、沢木さん、僕、今日はデートしていられないんです。田舎に不幸が出来てしまつて、これから帰らなければならないんです―。」

「僕はもう二人でデートする旅館の方も予約してお金も払つてあるのです。あゝそう、山田君の田舎は福島でしたね。それは大変ですね―。」

僕は失望をありありと顔に浮べて、声が些かふるえを帯びるのを、どうすることも出来ませんでした。

「沢木さん、その代りと云つてはなんですが、今日は僕の代りに此の人と遊んで下さい。加藤君と云うのです―。」

と傍に立つ、まだ十七、八才の高校生らしい相手を僕に紹介するのです。

「僕、加藤です。よろしくお願いします。」

加藤と云う少年は、僕に丁寧に頭を下げるのです。

「加藤君とは、ずつと前から交際していたんです。よろしくしく―。」

と山田まで一緒に僕に頼み込んで―。

「じやあ、僕、これから田舎へ帰りますから、ではこれで―。」

初対面の彼は忙しそうに、腕時計を見ながらそう云うと、改札口の方に、そわそわと飛んで行くのでした。僕は苦笑と共に、
「まあ、いゝや、そんな事情でわね。加藤君、さぁ行こうよ。」
と声を掛けると、私達は原宿駅の方に歩いて行きました。
「加藤君はあの人と、ずつと前から交際つているの？」
「え、そうです。一年位前からです。僕達は一週間に一ぺん逢つているんです。僕が山田君の下宿に泊りに行くんです。」
「へぇーそうかね。じやあ、君達は不自由はしていないんだねえー。」
「そんな事はありませんよ。同じ人とでは刺激がなくて倦きてしまうでしよう。やつぱりねえ。たまには別な人と遊んでみたいですよー。」
「加藤君はまだ、高校生でしよう。学業の方はおろそかにならないの？」
「僕、ちやんと勉強はやつています。だから大丈夫です」
「そう、そんなら、いいけどー。」
まだ時間は早いけど、旅館にその分だけ料金を払えばいゝんだからと僕は胸算用しながら、やがてその旅館の前まで来てしまいました。
「加藤君、こゝだよ。」
いきな軒燈に、八ッ手の植込が奥までつゞいて玉砂利が美しく敷かれて、ひつそりと静まりかえつていました。太筆に、門柱に、旅館「まこと」と書かれてー。

二、欲　情

二階、六畳の部屋に、僕達は案内されてー。
「どうぞ、御ゆつくり」
と女中に愛嬌を云われると、もう妙に興奮してきて仕方がありませんでした。玄関から二階の廊下につゞいて真赤なじゆうたんが敷き詰められてあるのも、なおさら欲情をかり立てられるのでした。
「ねえ、僕、一休みしたいから床を敷いて下さい。」
女中にそう僕は頼んで、その前に湯殿に降りて行きました。此の旅館は、何時でもお湯が湯いているのです。
「加藤君、お湯に入つて来ようよー。」と僕が誘いました。湯殿は美しいタイルの大きな浴槽に青い透明なお湯が、しずかに湯気を立てゝいました。加藤君が裸になつて這入つて来ると、肉付きのいい立派な身体をしていました。加藤君は無口な方ではなく適当に喋るのが僕は大変気に入りました。

「僕、裸を見られるのは恥しいなあー。」
と身体を洗いながら、チョッピリ加藤君はいたずらっぽく笑うのです。
「女の子みたいな事を云うもんじゃないよ。何処が恥かしいのさー。」僕がからかうと、
「だって恥かしいのは、恥かしいよ。僕のを、見ないでー。」と云って、恥かしそうにタオルで前部を掩ってしまうのです。「やっぱり身体は大きくても少年なんだなあー。」
と、私は相手のそのすれていない性格を一寸不思議に思いました。二人で湯槽に入ると、湯は勢よくざぁっと音をたてゝこぼれて行きました。
「こんなにして僕お湯に入るの、始めてです。好い気持ですねえー。」
「そう、加藤君は山田君とお湯に入った事ないの？」
「ありませんよ。だって、山口さんの下宿お湯ないものー。」
彼の坊主頭から、かすかに少年らしい甘酸っぱい匂いが流れて来るのです。
「そうだ、今度、何時か、君を温泉に連れて行ってあげようー。」
ふいに思いついて僕が云うと
「素晴しいなあ。僕、自分の費用は自分で払いますよ。だから沢木さんと二人で行こうよ！」と加藤君は有頂天になって燥ぐのでした。
お湯から上って二階の部屋に入って見ると、床が二つ敷かれてありました。夜、五時から宿泊する予定が加藤少年の出現に依って、お昼からこうして宿を取る事になってしまったのです。
「あゝ疲れた、僕は眠くなったよー。」
僕はひとり言のように云うと、ふとんの中にもぐってしまいました。実際、僕は昨夜は調べ物や書きものをして床に入ったのは一時近くでした。柔かい蒲団の感触が湯上りの僕の身体に、気持よく伝わります。僕はうとうとまどろんで、そのまゝ泥沼の中にひきずり込まれるように、眠りに入って行ったのです。どれ程か経ったでしょうか。僕はふと、温い掌が、僕の股間にそろそろと忍び寄ってきて、僕のパンツをまさぐり始めるのに眼が覚めました。次第にその手指は、這うが如くそろそろとパンツの裾をめくり延びてきます。加藤君が僕の蒲団に入って、加藤君の仕業なんです。
「沢木さん、僕と遊ぼうよ！ねえ、沢木さんー。」

彼が低声で僕を呼び起こします。
「ーあゝ、僕は眠つてしまつた。疲れていたんだねー」
気が付くと加藤君は、全裸になつて僕の横にぴつたり添つています。
「君は、何時でもそうやつて山口君と寝るの？そして二人で遊んでいるの？」
僕は少し相手をからかつてやりました。
「そうなんですよ。だつて山口さんは迚も僕に親切なんだものー」
「男が男を愛しては、いけないんでしようか。僕、男同志で遊ぶの、もう、止められないんです。僕ねえ、最初はねえ、こんな遊び知らなかつたよ。それを山口さんに教えられて、僕はそのとり・こ・になつてしまつたんですー。」
と云いながら、手指は間断なくーーーーをまさつします。
僕も快感を憶えて、手を加藤君のにのばしました。
五分位、その時間がつゞきましたでしようか、僕はもう完全にーーーーーしそうになりました。
「止めてくれ！」
僕は思わず叫びました。加藤君が身をすり寄せてきて
「ねえ、沢木さん　気持よかつた？」

加藤君はいきなり僕の上に乗つて、正常位の姿勢を取りました。そしてまさぐるように僕の唇を吸い始めました。僕のうなじに手を廻してー。若い加藤君の方が積極的に僕をリードするのです。彼には、遠慮とか恥とかがなく次々と先手を打つて、僕にいどみ掛つて来るのです。若い彼の肉体がじつてしているのが、我慢出来ぬのでしよう。僕の方がタジタジとなつてしまうばかりですが、積極的に遊ぶ、そう云う性向、つまり相手を喜ばせ、ホモ同志の長つゞきする所以ではないでしようか。

三　美しき青年

加藤君は、僕の唇を強く吸つて、且つ、自分の舌をじどつと僕の口の中に入れて、口中を搔き廻すのです。僕が、いやだと云つてもなかなか容赦しない。そんな強引な態度です。唇にも性感帯はあるのでしよう。そうやつて接吻を続けられると迚も快感を感じます。接吻を途中で止めながら、加藤君は、あゝとか、うゝとか、感極まつたような歎声を洩らし、僕に抱きついてくるのです。
変つた、ませた少年だ）と、僕はされるがまゝ、一方の頭の中では、そんな事を考えつゞけていました。
それから二週間程過ぎて、僕の所に加藤君から手紙が届きました。それに依ると、もう一度デートしたいから

今度の土曜日、夜六時頃、原宿駅前で逢いたいと、そのデートの申込みでした。そして、是非待つているからとの、熱の入つた文面ー僕はまだ、二日程余裕があつたので、その要求には応じられぬ旨、丁寧に書いて返事を出してやりました。あんな年端もゆかぬ少年と、年配である僕とが、ずるずると交際を続けては、将来ある加藤君の前途を傷つけてしまうのではないかと考えたのです。あのように、情熱を燃やし、僕に要求してきて、それがずるずる深みにはまつて行つて、暇と金を浪費してしまつたら大変な事になつてしまいます。その返事を出してから、加藤君からは何の反応もありませんでした。

十二月も半旬を過ぎると、東京も冬の気配がそろそろ押し寄せて来て、私の勤めている千代田区、大手町ビルの谷間にも、武蔵野を吹き抜ける烈風は、街路樹の枯葉を面白いようにころがし、ビルの街角に吹きつけています。都会の土の一片だに見られぬ舗装された街、私は、その日、地下鉄に通じる大手町の道路を、社が退けて急いでいる時、ふいに僕は声を掛けられたのです。

「沢木さんー」

しばらく振りに見る山田崇です。長身の、髪を美しく整えた、金色に光るネクタイをして、きりゝと引き締つた彼の相貌ー。

この美しき青年と作者は、どんな起伏に富んだ友情を展開するでしょうか。！

以下次号

来年の万博に備えて

来年三月より大阪府で万国博覧会が開催されます。全世界の三分の二以上の七十ヶ国がこれに参加すると聞いていますが、これに際しまして国内の同好者は勿論外国よりも同好者が多数集つて来るものと思います。恐らく一流ホテルを初め小さい旅館でも満員の盛況を呈することと思います。それで当会でもこれに備え色々と工夫致しておりますが、少なくともずつと会費を完納しておられる真面目な会員の方には、何はさておいても宿泊する場所はお世話するつもりでおります。その場になつて宿泊だ、相手だと言われても当会は責任は持てません。あくまで真面目な集団ですからそれに値する行動を常日頃より取つておかれる事が一番大切です。

危険な行為

毛利生

去る一月一日の産経新聞にこんな記事が掲載されていました。

昨夜大阪市港区〇〇町〇丁目〇〇番地に住む会社役員の広田重一（五十二才）方で同居中のA少年（十七才）と紅白歌合戦を観賞中に突然A少年が居直り強盗に変り広田さんを後手に縛り上げ広田さんの洋服の内ポケットに入れてあつた現金十七万円を盗み盗走した。と届出があり、所轄警察署では目下その少年の行方を捜索中、広田さんの話しに依ればその少年は暮れの一週間程前に天王寺公園の中にある美術館附近で知り合い、自宅につれかえつて同居していたもの。大体以上の様な意味の事が載つていました。普通の人であればありふれた強盗事件として簡単に考えてしまうのであろうけれ共、私はこの記事を見てピンと来るものがありました。第一に天王寺の美術館の附近で知り合つたこと、当大阪に住んでいる人は大抵知つている筈でありますが天王寺公園附近は以前にも時々書きました様に、夜になると百鬼夜行の色々の人達が色々のものを求めて集つて来るところなのです。その中でも美術館の附近は同好者が集り、その中には金銭を目当てに同好者を食い物にしようとする連中が大勢集つて来ております。ですから私の想像ではその広田さんなる人はおそらく同好者で小児科の人だろうと思います。そして相手のA少年は同好者か又はそう言う事をよく知つていて金儲けをしようと考えていた人間に相違ないと思います。そして広田さんは一人暮しらしく家族のいないのを幸いに自宅につれてかえつたのだと思われます。

扨て届出を受けた警察では強盗事件であるからそれはそれとして受付けますが、同好者のこうした場所で相手を求めることも、又自宅に連れかえつた目的等もすべて百も承知していると思いますだからその積りで根掘葉掘りして聞きたゞして調書を取ることだろうと思います。時にテレビを二人で見ている時に急に相手が居直つたとしても、二人の体格については知る由もありませんが、果してそう一対一で簡単に縛れるものだろうか？それにしても縛る紐をどう用意しておいたものか、その辺にも一寸ひつかかるものを感じます。それも考え方によるとその広田さんなる人がマゾヒストで自ら縛つてもらつて

興奮している最中にすっかり持つて逃げられたとも考えられます。何れにしても大金を取られその上で大変に恥かしい思いをせねばならない事になつたものだと思います。そして今後何日間か後にその少年が逮捕されたとしても、その大金はおそらく費消してしまつて戻つて来ないでしよう。でも警察での厳しい追求には相手が少年だし、やがては一切を白状してしまうことと思います。そうして広田さんとあゝもした、こう言う行為もした。又してくれと言われたなんて話して来ると、つかまつた事が却つて禍いとなつて広田さん自身が罪になるかどうかはわかりませんが、何れにしても相手は十七才の少年の事だから、広田さんは年輩者でもあり警察で大目玉を喰うことだと思います。こうして考えて見ると、変なところで相手を探し、それも僅か十七才の少年だと思つて安心して自宅につれてかえり、こんな結果になると新聞には勿論、成人の然も被害者の事であるから堂々と住所氏名も発表してしまうし、その上で十七万円もの大金を持つて行かれ警察では大恥をかくことになるし、その上、お目玉を喰つてはこの被害は甚大と言わねばなりません。然し一般の人達にはこの事件は一寸納得のいかぬところであるか、同好者には大いに手近かに起り得る事だと思うので敢えてこゝで取上げた次第であります。

大体に同好者は相手が自己の好みのタイプである場合には非常にもろく、平常なら気が小さくて何事もひかえ目な人間でも、この場合には前後の注意力もなくこうした危険をおかすものですから、充分に注意をする必要があると思います。

☆☆☆　　☆☆☆　　☆☆☆

入会して日は浅いがほんとうに良い会にはいつたと思つております。商売屋に勤めておりますが午後八時以降は一人で店を留守番しておりますので、会員の親しい仲間が時々泊りがけで遊びに来ております。こんな親しみある交際の出来るのは、お互いに会員であればこそだと思います。同年以下の人を求めます。

中肉中背で二十五才で会社員です。　大阪府　来訪結構　一五四二番

異性愛でも同性愛でも

毛利生

異性愛と同性愛とははじめ可成り異つていると私は思つていました。それは前者の場合はその結果が結婚と言う事になりそしてその間に子供も生れて来る。こうした事があるので前者の場合の愛情と言うものは深い永続性のものであるに反して後者の場合はそれ程に永続性はなくそして子供が生れると言う事もないので、いと簡単に体体を許してしまう、一度意気投合すればすぐにセックスに結びつく。こうした実情から考えて前者と後者との愛情と言うものは可成り違つたものであると私は私なりに考えていた。いやそれは私自身が今日迄死ぬ程に好きになつたことがないからかも知れないが私はそう思つていた。然し私はそれを訂正しなければならぬ様な実話を聞かされました。それは今から四年程前に聞いた話しでありますが、当会の会員でもう五十才に近い人で家族は奥様と二人の息子の四人暮しで奥様が可成り社交性のある方で某生命保険の外交員をしておられて可成りの収入を得ておられた様でしたが、そして息子の中の兄は二十二才で会社に勤めており次男が十九才で浪人をしていると話しておられたのですが、その次男が原因不明の病気でもう三ケ月以上も入院しているのにどうもはかばかしくない。それを聞いた親籍の人がそれでは一度拝み屋に拝んでもらつたらと勝手に決め込んで、ある日その拝み屋をつれて家に来たそうです。丁度奥様も兄も勤めに出てそして次男は病院に入院中なのでその会員である主人一人が家にいた時だつたらしいが、まあお茶でも入れようと思つてそわそわしていたら、その女の拝み屋が、まあお茶はいりませんから御主人先ずそこに坐つて下さいと言われるので、その前に坐したらとたんにじつと顔を見つめて「あなたには亡霊がついています。その人は男です。そして異常な関係にあつた人です。」と言われてどきつとしたと言つてました。尚言葉をつゞけて「その人は当時十九才の少年でしたが今は死んでいます。」その拝み屋はその人のろうばいした態度とそばに親籍の人がいる事を考慮して「こゝでこれ以上に申上げるとあなたの家庭を乱すことになりますから、あなた自身が一度私のところへ来て下さい。」と言われたと言つて私の許に来て話しておられたので、私は「あんた、そんな人に心当りがあるんですか？」と尋ねたら「あるんです。も

う三年近くにもなりますが、ふとしたことで知り合つた同好の少年で二人がほんとうに愛し合つていたのですが然しそれがあることから家内にばれて家の中で大もめしましてねえ、仕方がないので別れて出身地の四国まで送つて行つたことがあるのです。そして今では殆んど忘れかけていたのですがねえ」と顔を青ざめて話していました。それからあまり会の方へも来ませんので結末はどうなつたか知りませんが、同性愛でもそれ位いに深い愛情を持つとこうして死んだ後まで亡霊がつきまとうと言うことがあるんだと言う事を知らされました。

その頃に、別の人で会員ではなかつたが同じ同好者で雑貨商を営んでいる中年の人を私は知つていました。ある日久し振りに会つて私はふと思い出した様に、「あんたのとこの息子さんはもう高校を出たのかいな？」と聞いたら、その主人は一寸言いにくそうにして「それがねえ、高校どころじやないのやがな、どうしてそんな事になつたのか知らんけれ共ねえ、中学校を出る頃から急に気が変になつてねえ、それも格好の悪い、近所の女の子の前ばかりをさわりに行くのでねえ、近所よりも八釜しく苦情が出るので仕方なく精神病院に入れてるやがな」とこんな話しをしていたので、私は前記の人の話しをして、一度拝み屋に拝んでもらつたらとすゝめておいたのだつたけれ共、一向にそれもした様になかつた。そうしたら本年の五月だつたと思いますが、とうとうその子供は川へ飛び込んで死んだと新聞に出ていました。私はそれを読んで可愛想につくづく思いました。実に可愛いい美少年でした。そしてそんな中学を卒業したばかり位いの少年が、なんでそんなに色狂人なんかになつたのか、私はどうも割り切れない、なにか因果関係でもあつたのではないだろうかと今でも思つている。つまり同性愛でも異性愛でも真実に人間が人間を愛するのであるから本質的に変りのある筈がない。それを異質のものの様に思つて人に接している事は、人間性より考えても精神社会より考えても間違いではないだろうかとこの頃思つています。

砂と少年と縄

大阪　森本博志

少年は呪つた。それは、自分自身への呪いに他ならない。少年は焦つて助けを呼ぼうと試みたが、男が嚙ませた手拭の猿轡は、伊達ではなかつた。漁師の仕事柄十五才とはいえ、少年は灼熱の太陽を厭うものではなかつたが、流石に、こう身動きも出来ぬ姿では苦しい。十五才とは思えぬほど逞しく成長した太い腕は背骨の上にねじ曲げられ、双の手首は重ね合されて、細い綿ナワで縛り上げられ、首筋から前に回つた縄端は乳の辺りで左右に岐れ、幽かに黒いものの存する脇の下から背中に回つて再び臍の上で結び目を作り、少年の秘部の肉柱をきりりと締めつけたうえに双の　まで、丁寧に縛り上げてから臀部双丘に伸び、尾骨の上で一つ結び目を作つてから両の太腿をグイッと締め上げ、らせん状に両足に絡み乍ら足首にまで達した縄。

この美術的なモデルによる捕縄術の美事さは、海浜に集う人をして嘆美の響を放たしむるに充分であろう筈なのに、八月十五日、此処南紀の海浜には、人影一人見えなかつた。唯あるものは、逞ましい赤銅色に日焦けた肌に、妖しい赤褌をキリリと締めた一人の男、世界的に有明な日本の映画俳優に瓜二つの、ソンブレロを顔にのせたサングラスの男、は、私の化身に他ならないが、瞳に灼けつく陽光に逆つて、涙の瞳で見上げる少年には、悪魔神の化身と映じたことであろうよ。

都会人のクセに褌なんて見つともねえなアとからかつたのが、少年の失策であり、私には願つてもない好餌だつた。適当なやりとりの末に、他愛もない賭で、少年はカメラマンと自称する私のヌード・モデルを引受けざるを得なくなつた。むろん、厖大なモデル料に目が眩んだのも事実である。都会的な水泳パンツが、少年漁師の腰から引剝がされたとき、単なるヌードモデルではないことを多感な少年は覚り、激しく抵抗しようとして私の術中に陥入つたことを覚つたのは、自分の裸身に呪われた縄端が絡みついたときであつた。少年の秘部は私の推察どおりであつたが、私の秘縄が彼の部分に絡みついた時の彼の瞳の色は、生涯忘れることが出来ぬであろう。別段、何々流などと謂う難かしい捕縄術ではないのだが、乾燥し果てた、しなやかな綿の細引で、なめるように少

年の秘部局所に入念に絡みついた呪縛の縄目は、生れて初めて、縛められた少年をして、地獄の責め苦にも似たことであろう。

旧式なシャッターの金属音が、黒いボックスカメラの透み切つたレンズが、少年の浅間しい姿を刻明に印し去つてゆく。私の化身は少年の囚姿を両手に抱き上げて、波打際の穴に横たえる　砂を覆う、愛らしい、顔と丸刈りの頭だけが、砂上に残る。ソンブレロが、少年の顔面を覆う。誰かが遠くからやつてくる。化身は少年の傍らに横臥してくちずさむ、夏の日のラヴ・コール

若い男女は、波打際に横たわる漁師と砂に埋もれたソンブレロの愛人とに、祝福の目ざしを送り乍ら、抱き合い、去つて行く。

激しい疼痛が、いたいけない少年の全身に襲いかかつた。全身に悪魔のように絡みついたロープが、砂中の湿気を吸い、一様に縮みはじめたのだ。むろん、少年の秘部も又、例外ではない。

穴の深さは砂表に平行であつた。

満汐は、少年を覆う砂を徐々に沖へと渫つてゆく、そして、最初の露表物は、当然の事乍ら少年の秘部である。

化身は、いつの間にやら沖に泳ぎに出、海中に潜つて底の岩間から、さまざまの海の幸を獲つて来る。

海鼠は、ピンク色の海綿様の肉柱に串刺しにされて、彼の巨大な肛門全体で、激しく　動したが、全裸身に今や海水を吸い込んで刃物さながらに喰込む呪縄の苦しみに断末魔の少年にとつて、何と奇怪な愉楽であろう。

海鼠が、その生命を終らせると、少年の全身の苦痛はさらに激しくなる。化身は新らしい海鼠を少年の柱に刺す。

化身は少年の呪縛の一部に触れる。巧妙な縛めは瞬時にして悪魔のような縛めを解き放つ。その時、海鼠は、すさまじい勢いで、宙天高く吹飛ばされた。乳色の香気が、青い匂いを、磯の香と共に化身の頭上にも惜しみなくふり注ぐ

☆☆☆　　☆☆☆　　☆☆☆

会員としてはもう古顔です。ほんとうに入会して良かつたと何時も思つています。これだけ安心できる会はどこにもありません。好みは二〇才より二十五才位いの弟の様な人です。中肉中背で四十四才　会社員

兵庫県　三、〇一七番

美少年理容師

大阪　S・M生

年末の混雑をさけて十二月十五日に何時もいきつけの難波の地下にある、正司理容店に行つた。大阪繁華街の一等地で商売している店だけに設備も最新式で店内も広くざつと三十位いの椅子を備えたデラックスな店である。
自動ドアがスーッと開いて中にはいると、若い係の少年が元気に
「いらつしやいませ」
と言つて迎えた。つゞいて
「こちらえどうぞ」
と左側の中程の椅子に案内された。つづいて
「いらつしやいませ」
と言つて別の少年が現われた。私は
「あゝ君がやつてくれるのかねえ、そうか君はこの店に来て何年になるんかねえ」
と言葉をつゞけた。少年は
「もう丁度四年になります。」
「そうか、もうそんなになるんか、よく辛抱して頑張つたねえ、えらいよ」
「前に一度だけお客さんの頭を洗わしていたゞいたことがありますねえ。」
「うむ君はおぼえているんかねえ感心だね」
私はもう十年余りもこの店に通つている。だから毎年新しい中学を卒業したばかりの少年達が五、六人は採用されて来る。然しその中でこうして一人前の職人になるまで頑張る少年は半数位いしかいない。特にこの少年の場合は最初より私が目をつけていた少年だつた。全く美青年の一語にあてはまる。美しいマスク、それに中肉中背で一見弱々しく見えて清潔そのものの様で、言語動作が礼儀正しくまさに私の好みに属する少年だつた。然し、三、四十人もいる従業員の中でこの少年と特に接することは殆んどなかつた。唯の一度だけ二年程前に彼が私の頭を洗つてくれたことがあつた。その時は特に私の希望を入れて極く念入りにやつてくれた、私も彼をほめたことを今でもおぼえている。それをこの少年も今でもおぼえているらしい。
四年間の歳月はこの少年を立派な理容師にしたて上げていた。すべて手際よく整えていた。
「お客様はお住居いこの近くですか。」

「いや僕は住吉に住んでいるんだ。公園のそばにねえ。」
「え、そうですか私も以前は会社の寮が住吉公園のそばにありましたのであの辺はよく知つています。」
「そう僕の家は公園の北側の〇〇マンションの三階で茂木と言うんだから、又ついでがあれば遊びにお出でよ」
「はい、ありがとうございます」
「今は君はどこから通つているの」
「今は会社の寮が長居公園の方に変つたのでそちらから通つています。」
「休みの日なんか何をしているの」
「えゝ休みと言つてもなかなか時間がありませんしねえ第一毎月休日の中の一日は奉仕に出掛けますしね。それに時々講習会などもありますしねえ。たまにボーリングに行くか映画に行くだけです。」
「そうそれは気の毒の様だけ共、かえつてそれの方が結果的にはいゝかも知れないねえ、悪い虫がつかぬからねえ、君は九州の人?」
「いゝえ私は北陸の富山県です。」
「あゝそう、富山県の出身かね。僕も北陸線の長浜市の生れですよ」
「あゝそうですか、長浜市ねえ、よく通つているから知つていますよ」
「君、お正月に郷里に帰るの?」
「はい、かえります。両親が待つていますから」
「そうねえ、そりやかえつて上げたら喜ぶでしようね。それに君も家の人達に会い度いだろうしねえ、それの方がいゝよ」
二人はこんな話しを交し乍ら散髪を終えた。
「お粗末さまでした。」
「いゝやよく出来ているよ、ありがとう」
「そう言つて頂くと嬉しいですよ」
少年はうれしそうに態々待合室の側まで私を送つて来た。私も何んだか楽しい気持だつた。今まで目をつけていたあの可愛いらしい少年と今日は出会いそして色々と打ちとけて話し合えたことで満足していた。そしてあの二年程前に一度だけ、たつた一度だけ僕の頭を洗つたことを彼はおぼえていた。毎日毎日多数の人の頭を洗つているのにそんなことを一つ一つ覚えているものだろうか?それとも特に僕の事を頭の中に残しているのだろうか。一人でこんなことを考えて楽しんでいた。
大晦日より元旦にかけて大雪だとテレビニュースは報じていた。あの少年はさぞ雪で困つているだろうなあ、

でも久々に両親の許で正月を楽しんでいるだろう。こんなことを一人で思つていた。

　丁度一ヶ月経つた一月十六日、また何時もの通り例の正司理容店に行つた。受付けの少年に迎えられて奥の椅子に案内された。流石に一月で余り混んではいなかつた。私は見廻して例の少年を見つけて、その案内の少年に

「今あそこで顔をそつている人にやつてもら度いんだ」

と言つた。少年はすぐ承知して

「あゝ木村さんですか？」

と言つて、その少年の側に行つた。

その木村と言う少年はちらつと僕の方を向いてつかつかと歩いて来て

「いらつしやいませ、すみませんがしばらくお待ち願います。」

と言つた。私はすぐに

「あゝいゝですよ、どうぞゆつくりして下さい、構いませんよ」

と言つた。少年は元に戻つて仕事を始めた。

間もなく木村少年は小道具を持つて

「お待たせ致しました」

と言つてやつて来た。

「君、お正月は大雪で大変だつたでしよう」

「えゝ、行きもかえりも三、四時間ずつ汽車が延着しましてねえ弱りました。でも遊びにかえつたんですからねえ。そして雪もあれ位い積つてしまうと案外暖いですよ」

「そうねえ、僕も経験があるけれ共、割合に寒くないねえ」

二人は会うなりこんな話しをだした。

「今日はお急ぎじやないんでしよう」

「うむ、ゆつくりやつてくれていいよ」

彼は特に念入りにやつてくれた。髪を刈つて頭を洗い、そして椅子をたおして顔をそり初めた。マスクをかけている彼の顔を下からのぞき込むようにして見ているとほんとうに美しい顔立ちであることが尚更に確認された。そして木村少年の息づかいが乱れていることに気がついた。マスクの下でフウフウと息を使つているのに何か興奮している様に見えた。今まで何百回か散髪をしたことはあるが、こんな息使いを聞いたことは初めてであつた。少年は必要以上にと言つてよい程に口のあたり、そして口の中え指を差込むようにして念入りに顔をそつていた。私も最も理想とするこの美少年にふれられているので大

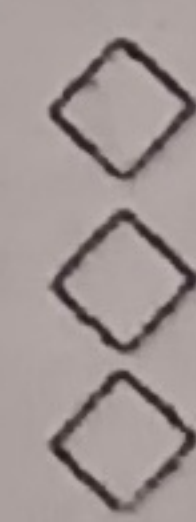
変にいゝ気持になつてうつすらと目を閉じて楽しい気持でいた。私はこの時程に理想の美少年としみじみ感じたことはなかつた。若しこれと同じ様に他の人がやつたなら私は恐らく怒つてしまつたかも知れない。口の中に指を入れてたり、口のあたりを何度もなで廻したりされてそれで快感を味わつたのだつた。少年もおそらくそれで楽しんでいたに違いないと私は明らかにそう悟つた。それから最後に長い時間をかけて肩をもんでくれた。そして終つた時に少年は申訳けなさそうに

「指名料百円多くなつておりましてすみません」

と言つて私に伝票を渡した。私はこれを受取つて

「あゝいいよ」

と気軽に答えた。少年は前の様に待合室の入口まで送つて来てにつこり笑つて頭を下げていた。私は浮き浮きして、今後もずつとこの木村少年を指名してやろうと考えていた。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

大阪近郊の人達は勿論、地方の会員の方でも出来るだけ余暇を利用して会の事務所に遊びに来て下さい。そして事務所に来ている人は皆んな会員の方ですから気軽に安心して話しかけて下さい。その際に好みの相手の人がおられても自分より話し難い様な場合は事務所に備え付けの即席交際申込書に記入（無料）して毛利宛に出して下さい。諾否の結果はわかりませんが、勇気をだしてどんどん申込んで下さい。恥かしがる事はありません。

旧会誌も残部が少々あります。この種の読物としては当会の会誌は可成り人気があります。未読の方は是非品切れにならぬ中に購入して読んで下さい。送料共一冊三五〇円です。

会の休日は毎週火曜日と第二、四日曜日です。それ以外は毎日午後二時より開放しております。ウイークデイは午後八時まで土、日曜日は夜十時まで開放しております。架電される場合でもこの時間内にかけて下さい。

近頃年輩者でもこわいのがいる

毛利生

今まではおどされたの、やれたかられたのと言った事件は大抵被害者が年輩者で加害者は若い男ときまっていた。それが最近に聞いた話しを二、三度紹介すると逆に被害者が若い人でおどして金を巻き揚げたり、寸借をしてどろんをする方が年輩者であると言う事を知っていいや時代も変って来たものである。

この道では年輩者でも余り信用出来ないのがいる。つまりこの頃の老けはこわいなどの言葉さえ、ちまたに聞かれる様になつた次第である。ことわつておきますが、この加害者、即ち悪い奴は会員以外の人間であつて会員間で今月まで九年余りを過ぎましたが、いまだに一件もこんな事件は起つておりません。

第一話は三十五才の自営の商売をしている人が、ある映画館で自分の好みの五十七、八才の肥満体の年輩者を見付けて外へ連れ出し、食事を共にし、果てはホテルに同伴してうまく目的を達したのでした。相手の身なりと言い言葉使いといい、動作なども決して立波と言う程でもないが、余り悪くもなく却って素朴に見えて大変気に入り、すつかり安心して別れの際に名刺を渡して今後も時々会つて欲しいと言つておいたところ、数日後に電話がかかつて来て待ち合わせ場所を決めて以前と同じく二人で食事をし盃をかたむけて、ころあいに又ホテルへと楽しんだのでした。年令は若いけれ共、ほれた弱味と自営で商売をしている関係で気前もよく、その都度全ての費用は若い方が支払つていた。それから数日後にも電話があつて、同じく目的を達した。こうして二人の間は次第にふかく熱を帯びて来たのもほんとうの様に見えた。それから数日後も又二人はデイトを楽しんだ。こうして丁度五回目を過ぎた後の数日後に今度は別の男より電話がかかつてきた。そして若い男の声で次の様なことを言つて来た。

「一度お会いして話し度い事がある。電話では一寸話せない事だ。拒絶されると大変な迷惑があんたにかかることになる」

と言つた内容の話しなどで、止むを得ず早速に会うことにした。指定された場末の喫茶店に約束の時間より少し早い目に行つて待つていたら間もなく一見してゲイボーイとわかるような二十二、三才位いの男がやつて来て、

いきなりその男に向つて
「〇〇さんですねえ、わたし〇〇です。お待たせしました」
と言つて向いの席にどかつと座つて再び
「〇〇さん、わたしのだんなを取つてくれて、一体この始末をどうつけてくれるんですか」
「だんなつて一体誰れのことですか」
「おとぼけじやないよ、〇〇のことよ、ずい分可愛がつてくれたと言うじやないの」
「あゝそうですか、〇〇〇さんのことですか」
「おとぼけじやないよ、そんなこと知つているくせに、彼の口からも言つたでしよう。うるさい私がついているつてねえ、さあこの結末を一体どうつけてくれるの」
「？」
あんまりのけんまくに押され乍ら
「じや一体僕にどおしろと言うんですか」
「じや卒直に言いましよう。あんなわたしのだんなと前後五回遊んだでしよう。だから一回三萬円の割合で合計十五萬円出してもらいましよう。それが嫌ならそれ相当の覚悟をなさつた方がいゝでしよう。お商売もしておられる事だしねえ」
「十五萬円なんてそんなお金、とても出来ません。とに角しばらく待つて下さいよ」
「あゝいゝですよ、一週間待ちましよう。それが過ぎたら覚悟を決めなさいよ。十五萬円どこの損じやありませんよ、いゝですねえ」
こんな状態で話しは一応今日は互いに引き揚げることにした。
その後、その三十五才の男は悩みに悩んで幾らかの金額をまけてもらつて支払つたそうでした。これは実話に近い最近の出来事でした。
第二話は若い二十二、三才位いの老け専の会員が今まで度々事務所に顔を出していたのに、最近二ケ月近くも顔を見せないので一寸不思議に思つていた。そうしたら或る日ひよつこり事務所にやつて来たので一体どうしていたのかと聞いてみると、次の様な話しでした。
どこで知り合つたのかくわしい話しは言わなかつたけれ共、とに角、外部で知り合つた五十才過ぎの男と交際している中にその年輩よりお金を借して呉れと言われて最初は三千円余りの持ち金を貸した。又その次も前の分を返済もせずに無心を言う。然も自分のアパートも勤務先の会社も教えてしまつたあとだから始末が悪く、とう

とう会社もやめてしまつて、現在郷里に引きこもつているると話してました。実に年配者だからと今までは心を許していたが、余程要心せねばなりませんねえ、こうしたつまらぬ年砦者が出て来るのもこの人達は若い時代からこの道にぼけてしまつて自分の仕事らしい仕事もせずに遂に年をとつてしまつたのだろうと思います。だから年砦になつてもそれ相応の仕事にもつけず、こんなつまらぬことをして生活せねばならぬのではないかと思います。

他にも誰れの話だつたかわすれましたが、やはり外部で知り合つた老けと二人でホテルに泊つた時に、先に風呂に這入れとすゝめておいて、入浴中にお金を持つてどろんされたと言う話も聞きました。

お互いに充分注意をすることですねえ、つまり余り外部のへんなところで素状のわからぬ人と交際しないことです。

入会して約三年間、別にガッガッと相手を求めようと致しませんが、どんな事でも打明けて話し合える友達を求めます。自分で言うのもおこがましいが、性格は真面目で温和です。

御便りをお待ち致します。趣味は麻雀、中肉中背

中肉中背で会社員　二十九才

大阪市　二、三六九番

年寄りで余りたくましくはありませんが、人間性については会員の皆さんより善人すぎると言われております。父親のムードを求め度いと思われる会員の方は事務局経由でお便り下さい。返事は必ず出します。果して御希望の相手になれるかどうかわかりませんが、誰方でも便りをお待ち致します。六十一才

一・六三米　五三瓩　温和　会社重役

大阪市　三、〇一六番

非行への道

大阪　一会員生

午前十一時頃に「今日は」と言つて森少年がやつて来た。私はふと少年を見て、「どうしたんだこんな時間に、学校を休んだのか？」と尋ねた。少年は「今日は気分を悪くしたからかえつて来た」と答えた。「気分を悪くしたつて一体何があつたんだ？」少年は話しにくそうに「二年生の奴にいんねんつけられてなぐつてきやがつたんで、なぐり返してやつたんや、でも先生がやつて来てそいつらはいつもそんな事をするので、僕には何も言わずそいつだけに注意をしとつた。でも気分が悪いからかえつて来たんや、一寸ほゝがはれているやろ」「うん、そう言えば一寸はれているみたいやねえ、でも喧嘩はしたらいかんよ」

少年はいつもの様に私の質問に答え終ると気楽に椅子にかけて、そこらにある本を読んでいた。少年は更に、「おつちやん、小林は」とたずねた。彼と中学時代同窓の小林少年のことだつた。「小林は学校だよ。今日は午後四時位になると思うよ」「毎日休まんと行つとるんか？」「勿論、うちではさぼつたら怒るからねえ」しばらく無言で本を読んでいた。森少年は思い出した様に「おつちやん、今日は南海―阪急戦や、ナイターなんか一度も見たことがないんや、つれて行つていな」「うむ行つてもいゝなあ、でも小林がかえつて来てからにしようや、そうでないと気を悪くしたらあかんでなあ」

「そらそうやなあ、じやそうしよう」

二人はこんな話しをし乍ら思い思いに読書をしていた。

時候は九月中旬でナイターには絶好の時期だつた。

午後四時を過ぎた頃に小林少年は学校からかえつて来た。早速野球見物に行く話しをしたら行き度いんだけれ共、宿題がたくさんあつて行かれんと残念そうに言つていた。小林少年はこの森少年と中学時代は同窓だつた。でも小林少年の家は貧しく到底高校まで進学は出来そうにもなかつた。それをこのおつちやんと二人が呼んでいる吉田と言う老人が、割合に学校の成績も良く可哀いそうだと思つて、小林少年の両親に話して自分の家に引取り高校に上げてやつているのだつた。幸いに府立の工業高校にあがれたので、本人もその気になつて少年乍ら張り切つて勉強していた。その反面に森少年の方は中学時

代は小林少年と大して成績も違わぬ程に可成り出来る方だつたが、公立を敬遠して私立の商業高校にはいつたのだつた。少年期はすぐにかんきように順応すると言うが確かに森少年の場合は、現在の学校の課程位いは大した苦労もいらないので自然と手を抜いた様な怠けぐせがつきかゝつていた。一方小林少年の方は公立だと言うのでその気になつて自ら勉強にも欲を出してやつている様だつた。午後六時前に吉田は森少年と二人で南海本線の住吉公園駅より電車で大阪球場に向つた。

流石に好カードだけあつて既に内野席はほゞ満員の盛況だつた。二人は少し空いている外野席に行くことにした。野球は期待通りの好試合で面白かつた。そしてひいきチームの阪急が勝つたので尚更に興味深いものだつた。か

かえりは地下鉄で玉出駅におりた。森少年が小遣銭がないと言うので五百円やつて玉出駅を出たところで別れた。家にかえつて小林少年に今日の試合の経過や見どころなどを話していた。その時に呼鈴が鳴つて来客らしかつた。表の鉄のドアを開けるとそこに見知らぬ中年の婦人が立つていた。そしてふかふかと頭を下げて一礼し

「あの吉田さんのお宅はこちらさまですか」

と丁寧に尋ねた。

「はい吉田でございますが」

と返事すると更に改まつて

「あのいつもお世話になつております。森の母親でございます。もつと早く御礼に上らねばなりませんのに、大変失礼ばかり致しておりまして」

と一応御礼の言葉を述べたあとつゞいて

「実は今日は私共の子供は御世話になつておりませんでしようか？」

「あゝ森君ですか、実は昼前よりずつて来ておりましてねえ、そして夕方より大阪球場へ私と野球を見に行きまして、そう十時一寸前位いに玉出駅の附近で別れましたが、まだかえつておりませんか」

「えゝ、まだかえつて来ないものですから一寸心配致しておるんですが、実は今朝主人（父親）とけんか致しまして、それでぷいと出て行つたものですから余計に気になりまして、主人も心配しておりますんです」

「そうですか、今日はほゝを一寸と赤くはらしておりましたが、それでですか？」

「えゝ主人はカッとなるとすぐに手を出すものですから」

「そうですか、私には学校で二年生の奴にいんねんつけ

られてなつたつて言つておりましたが、じやそちらの方が事実ですねえ」
「実際どこへ行つたんでしようねえ、困つた子供ですわ」
「さあねえ、どこか心当りの友達の家でも行つているんじやないですかねえ、でも今日会つた時の感じでは別にくよくよしている訳でもありませんでしたから、そう心配されることもありませんでしよう。私から見れば大変気嫌よく話していましたですよ」
「そうですか、そんなにしていましたか」
「まあ他人じやなくて親子の間柄の事ですから、そんなに心配せんでもすぐ忘れてしまいますよ。そして私の方へ今度来ましたら必ずかえる様に言いきかせますから」
「そうですか、それではくれぐれも宜しくお願い申上げます。」
森少年の母親は丁寧に挨拶をしてかえつていきました。
あとで小林少年と二人で森は一体何をしたのかなあ、どうして父親が顔なんかをなぐつたりするんかなあ、若しケガでもしたら大変だ。それにしてももう十二時に近いのに一体どこへ行つているかなあ、こんな会話をしていた。

明くる朝早くその母親は再び訪ねて来た。そして昨夜は一すいもせずにかえりを待つていたと眼を赤くして話していた様子を見ると痛々しくも見えた。
とに角そう幾日も学校を休むことはいけないので、早く探し出して学校へやらねばどやつきになつておられた。私もそれに同感だつたが、肝心の本人が不在では話しのしようもなかつた。しばらく泣言を並べたあと母親はかえつていつた。
その次の日の朝早く又も母親がやつて来た。然し今日は話しの内容が一寸変つていた。それは昨夜おそく森少年は自宅にかえつた様だつた。二晩も友達の家に泊めてもらつて昼は卓球場で遊んでいたと話していたそうだつた。
でももう学校にはいかない。それより友達の勤務している食堂で働くと言つて聞かない様だつた。両親がいくら説得してせ頑として再び学校にいくとは言わないと言つている。
それで仕方がないから大変御迷惑ですが、吉田さんに一度子供によく言い聞かせて学校にいく様に言つて欲しいと頼んで来た次第だつた。吉田はそれが効果があるかどうかは別として一応説得してみることに承諾した。

その日の午後に森少年は母親に行つて来いと言われたらしくやつて来た。早速少年に話して見た。
「今は簡単に学校を退めると言つているが、果して数年後になつて後悔しないかい、それは今の気持ちと数年後にはずい分変つて来る筈だよ。折角両親が努力して進学させてくれたんだから惜しいと思わないかい」
色々の角度より勉学の必要性をといてみたが、どうしても学校をつゞけるとは言わない。
その理由は次の通りだつた。
「父親はタクシーの運転手をしているのだけれ共、最近病気がちでつい先頃まで病院に療養していた。それでも学費だけは何んとか苦しい中から出してくれているが、小遣銭は一銭もくれない。それに毎日毎日家計が苦しい苦しいと言われると、とても学校に行く気にはならない」
と、一応子供なりにもつともなと思うことを言つている。
吉田も森少年の家庭の事情はよく知らないし、本人が実際に毎日の生活の中で肌でそんなことを感じ取つていて学校に行く気になれないと言うことであれば、それも仕方がない、それ以上に無理にすすめる訳にもいかなかつた。
森少年の母親にせつかく頼まれ乍らこの問題は本人の意志に任すより仕方がなかつた。
それ以来約一週間程、彼は姿を見せなかつた。そしてふとやつて来て、やはり彼の友人の勤めている〇〇食品会社の食堂部に勤務していると報告旁々話していた。勿論食堂の事であるので勤務時間の関係で市内の中心地にある会社の寮にはいつて生活することになつたと話していた。同じ市内だとは言え、十六才の今日まで実家を離れたことのないこの少年が果して、まじめに気嫌よく勤めてくれゝばいゝがと吉田は一人で心の中で心配していた。その次に訪ねて来た時は森少年はプカプカと煙草を吸つていた。吉田はそれを見てひどく注意をした。森少年はその時は素直に吸うことを止みた。その日は数時間、吉田の宅で遊んでかえつて行つた。そして社会生活にはいつてから丁度一ヵ月が過ぎた。森少年は生れて初めて自己の勤労の報酬として約二万円近くの金を受取つた。その中の半分の一萬円は母親に渡して家への仕送りとした。あとの一萬円が自分の自由に使える金だつた。その頃には友人の山崎少年も森少年の入社と同時に寮に移り住んでいたので二人共同じ様な状態だつた。
中小企業だが事業柄従業員も割合に多くこの二人が入

つた寮だけでも約五、六十人の青少年の男子が生活していた。そして大抵の連中が中卒か高校中退の者で自由勝手な私生活をしていた。会社側としても余り規律をやかましく言うと退職されてしまうと困るので余りやかましく言わないので、つい自分の気の向くまゝに行動していた。先輩の一人で馬場と云う二十才になる青年が度々、松島新地へ女買いに行くことを誇しげに二人に話すので思春期の燃える様な二人には、もうじつとしておられなかつた。とうとうその馬場先輩に一緒に連れて行つてもらうことにした。こうして僅か十六才の二人の少年が何の考えもなく欲情のおもむくまゝに売春婦に童貞を捧げてしまつたのだつた。この話を森少年は一緒につれて来た山崎少年と共に吉田に話した。吉田は阿然として聞いていたが、今更この二人に説教をして見たところで効果のない事を考えていたからだつた。ガソリンに火をつけた様な状態で今はもう止めようもないと考えていた。それよりも自宅で勉強に励んでいる小林少年に引火することを恐れた。唯吉田はこの二人の少年を前にして性病の恐しさをこんこんと話した。特に梅毒についてくわしく話してやつた。二人は一寸気にして心配げな顔をしていた。それから半月位いづつ来る度に酒、女、煙草の話しなどで彼等の生活は非行の一途を辿つていることを感じていたが、吉田の注意を余り効果はなかつた。話し振りに依ると既に数回も松島新地で女遊びをしている様だつた。勿論、新地は一応バーと言うことになつているのでウイスキーなども可成り呑んでいる様だつた。中学二年の後期から高校一年の前期まであれだけ色々と注意もしたし、可愛いがりもした。そしてその頃は比較的まじめだつた森少年が僅か数ヶ月でこれ程に変つてしまうとは実に吉田は自分乍ら情けなく思つた。

でも現実の問題としてどうすることも出来なかつた。何れは早かれ遅かれ男子である以上女を知る。そして酒も呑むだろうし煙草も吸う時も来る。然しまだ十六才だ、あまりにも早すぎる。体格は成人の男子の様に発育しているが思考力が幼稚だ。だからこれに熱中してしまうと大変危険だ。その事を吉田はくり返しくり返し話して、ほどほどに自制する様に話した。その時は別に反発もせずに話しを聞いてはいるが、やはり寮にかえつて他の連中と行動を共にすると意志に反して行動してしまうように思えた。それから約一ケ月近くも姿を見せなかつた。そうした行動が面白くてもう彼等には吉田の宅で遊ぶ位いの事では物足りないのだろうと思つていた。

そんな時にぴよつこり森少年が訪ねて来た。その時の感じは妙にしよんぼりしていたので
「どうだ何かあつたんか？」
と尋ねてみた。言いにくそうに
「うむ、えらい事してしもうたんや、会社は首になるし警察には連れていかれてなぐられるし、ひどい目に会つた」
「そうだろうなあ、何れはこんな時期が必ず来ると思つとつたわ、お前達のやつていることはでたらめだつたもんなあ、そう世の中と言うものは自分の好き勝手なことをして生活していて何の制約も受けないなんてことはあり得ないよ、まあそれはそれとして一体何をしたのか？」
「四、五日前になあ、おつちやん、パトカーが朝早く寮へ来よつてなあ、僕と山崎君と二人を迎えに来よつたんや、そして警察へ連れて行かれてなあ、親は呼び出されるし、えらいこつちや」
「うむ、それは何をしたからやねん」
「初めは会社のカメラ盗つたからや」
「そうれみい、あんまり女遊びばかりしているから結果はそんなことになるんや」
「うむ、警察でもそんなことが全部ばれてしまうしなあ、又おやじは怒りよるし、会社は首になるし、さつぱりや」
「とうとう行きつくところまで行つたのか、僕はそれを一番心配しとつたんや、でもお前はまだ幸福や、父親がそうして迎えに行つてくれるから少年院送りにならんで助かつたんやで、だから今度からもうそんなことしとつたらあかんのやで、今度したら少年院に入れられてしまうでいゝか？」
「うむもうこりた、もうせえへんで、そして考えてみたらあんな女買いなんて阿呆らしいなあ、一回行つたら二千円もかゝるんやで、考えてみたら馬鹿馬鹿しいわ」
「そうだた、男は特に君等位いの時分は唯の好奇心で行くのだけれ共、自分でやつていても大して変らへんやないか、一寸位いの違いで二千円も使つたら馬鹿馬鹿しいよ」
「うむそうやね、もうほんとうに止めるよ、そしてどこか又早く就職せんならんしねえ」
「そうだ、今度はよく考えて、そして二度と途中で止めんようにせなあかんで」

以下次号

会費の納入について

毛利生

本会が財政難の為に経費節約して会則をガリ版ずりに致しましたところ、印刷が不鮮明の為に会費と入会金などが充分に納得しておられない方がある様ですから為念に次に明記します。これを御覧になつて会費未納又は不足になつている方は至急に御送金下さい。

入会金　金壱千円右（入会時一回限り）

会　費　金参百円也（月額）但し金壱千五百円也）を一括前納の括前納の場合は六ケ月分に充当す。

以前より繰り返して申上げております通り、会費の納入状態が非常に悪く、従つて会誌も二ケ月に一回の割合で定期的に発行することが出来ませんでした。地方の会員の方に言わせますと、会誌が送付されて来ないから会誌は発行出来ない。これではイタチゴッゴで解決はつきません。要はどこにポイントを置いてこの問題を考えればいゝのかと言う事になると思います。そこで私が考えますのに決して我田引水ではありませんが、そもそも本会の存在の目的は会（つまり主宰者の毛利）と会員との間は権利義務で成り立つている訳ではありません。それは本会創立の趣旨書をお読みになつて僅に承知しておられると思います。そして創立以来満八カ年にわたつて会誌も二カ月に一回の割合で順調に発行して来たのでありますが、それが御承知の通り一昨年の暮のつまらぬ事件の為にこうした現状におちいつたのでありまして、然もその第一の被害者は誰れかと言いますとこの毛利、私であります。それにも不拘会員の方々が会費すら前納して来ないと言う事は、毛利と致しましてももうこれ以上の負担に堪えられないと申す外はありません。何んと説明しても第三者は善意に解釈してくれないこの不名誉な仕事に心身共に十年間も尽して来て、そして利益するどころか僅かな私財も全部注ぎ込んでしまつて、然も私は孤独な六十才を越えた老人にこれ以上何をせよと言われるのでしょうか？　私は今迄やつて来た努力は自己の信ずるところに向つてやつて来たのであるから決して後悔は致しません。然しその十年間に延何万人と言う同好者に接して来て、そして会と共に歩んで来て現在かゝる状態であるとすればこの先も真闇みであることは判然と致しております。そこへ飛び込んで私に自殺でもしろと言われるのですか、これが実際の私の立場であり実状であり

ます。会費を三ケ月分や五ケ月分前納されたからと言ってそれを取込んで消えていく様な毛利ではありません。最近入会者も割合に多くなつて来ております。とりわけ再入会か（以前に入会したことのある人）可成りあります。この様なことは他の会では余り例のない事だと思います。それは言いかえれば当会が会員に迷惑をかけて去つて行かれたのではないからで、自分より去つて行つたものの、やはり会の有難味が判つて来て戻つて来られるのだと私は思つております。くどくどと書きましたが、そして意味の判りにくい点もあるかと思いますが、要は現在会の財政が大変に苦しいと言う事と毛利が十年間にわたり心身財共に打ち込んで来ていよいよドタン場に来ていると言う事を御理解下さいまして、会費を出来る丈まとめて前納して頂く様にお願い致します。又長い間の音信不通で会費の自己の納入状況の不明の方は本年七月よりとしてまとめて納入して下さい。それまでは一応全部カットして整理することに致します。

若い友達へ

年令二十三才位迄の方、友達になつて下さい。希望として、眼鏡なし、毛深くない人、小柄で健康な人、そして、しばしば会つてくれる人。僕は、身長一六二、体重五十四瓩、大阪在住です。三〇才、電工、顔立ちは一寸女性的な方、趣味としては、映画、音楽を聞くこと位です。問合せがあれば写真送ります。

大阪市　二六四八生

会員になつて八年余りまつたく当会と歩みを共にして来た私です。毎日商売に忙しく従つて次から次へと相手を求める訳には参りませんが、会に籍を置くだけで結構楽しく安定しております。古い会員の方とは親戚以上の附合をしている人もおります。地味で真面目な青年の方を求めます。当方三十六才、中肉中背で明朗で大阪に永年住んでいます。

大阪市　三〇一九番

注意すること

事務局

(1) 文通の手紙を転送依頼する際に封書の裏側に自分の住所氏名や会員番号を書いている方がありますが、これは内部の文面の末尾に書いておられる事は差支えありませんが、封筒に書かれると表面は当会で書きますので表裏の筆跡が違つたり、インクの色も違いますので相手に好感を与えませんから絶対に止めて下さい。

(2) 会費其他に切手代用される方は利用度の高い一五円から五〇円迄位いの価額の切手を送つて下さい。時々百円や二百円と言う余り使用しない価額の切手を送つて来る全く非常識な方がおられて困ります。

(3) エチケットとして相手に写真を求めたり、住所を知らせてもらい度い時は先ず自分の写真を送るなり住所を知らせてから求める可きです。尚当会では如何なる場合でも会員の住所は誰れにも知らせません。

(4) 地方の会員の方で来阪される方は予め前もつて日時を事務所に通知しておいて下さい。そして当地の会員の中で自分に適当と思う方を撰び二、三名手紙でも出しておかれると来阪もより楽しいものになります。

(5) 事務所に来られた方は御承知の如く毛利が一人で本会を運営しておりますので多忙でお茶のお世話が出来ませんので欲しい人は御自由にお上り下さい。その節に他の会員の方々の希望まで聞いて上げられますと、その人は必ずいゝ相手を見付けることが出来るでしょう、と思います。お茶がとりもつ縁ということもありましょう。

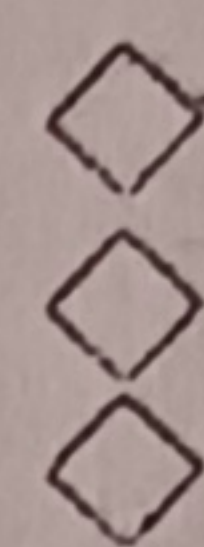
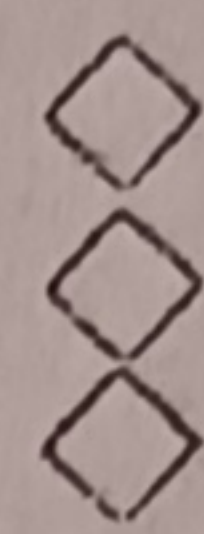
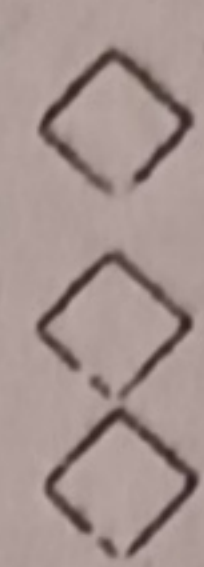
(6) 交際申込み又はその回答の場合などによく自分の電話番号だけを記入している方がありますが、これでは電話のかけ様もありません。電話番号まで相手に教えるのなら会社名や自分の姓名も判つきり書いておくべきです。

(7) デイトの場合の目印によく週刊紙を手に持つているなどと書いている方がありますが、週刊紙などは誰れでも案外持ち歩いている方が多いものですから、もつと何か一目で判る様な目印を考える可きでしよう。例えば腕時計を外して持つているとか、水玉模様の黒地のネクタイ等にすればいゝでしよう。そして先ずそれまでにお互いの姓位いは知つておく可きでしよう。

(8) 同好者は割合に社交性に欠けている人が多い様に思

います。これなども出来るだけ事務所に遊びに来て自分から進んで他の会員の方に話しかけて訓練すれば良いと思います。

(9) すべての通信には必ず会員番号を記入して下さい.

◇◇◇　　◇◇◇　　◇◇◇

事務所の一隅で若い会員二人が話していた。聞くともなしに聞いていると次の様な話しだつた。

「昨日の日曜日の午後に映画でいゝ人がおつてねえ」

「ふむどんな人なの」

「そうねえ、まだ二十才になるかならぬかのねえ、なかなかハンサムで感じのいゝ男だつたよ、でもねえホテルへ行つて最後までプロと違うやろかとか、名刺やお金を抜かれへんやろかとか気をつかつてねえ、風呂は二人ではいつて同時に出なければいかんし、それに便所にも行かれやへんねん、ほんまに気が気やなかつたわ。その点は会員同志やつたら安心やけどねえ、映画館あたりで出来たらそれが困るわ」

「そうねえ、ほんとうに危いからねえ、ほらあの三年程前に京都で外人を殺した男ねえ、あれでもつかまつたのは名古屋の今池の映画館やつたんやろ、あんな人殺しをした奴でも平気で映画館に入つてんしとるんやからあぶないねえ」

「ほんとにねえ」

「それに駅の便所でもだくさんの人がうろうろしとるやろ、全くあわれに感じるねえ」

「まあ相手が欲しいと言うその気持はわからんでもないけれどもねえ」

「あんなの見ると、僕等も同類だと思うと全くあさましい様ないやあーな気がするねえ」

御詫びと報告とお願い

毛利生

入会されてまだ半ケ年位いの会員の方々は本会に対して不信を持つておられる方も可成りおられると思いますのでこゝに現況を御説明申上げ御了解を得たいと思います。実は今迄皆さんにお知らせすると却つていらぬ御心配をかけることになると思つてその事にふれずに当会の立て直しに努力して来たのでありますが、実は昨年の春よりつい最近まで本会は財政的にどん底の状態でありました。そして昨年の五月頃に一そう解散してしまおうか?とまで話しが持ち上つたのですが、折角九年近くも続けて来た当会を解散する事は何んとしても残念だとの意見もあり、その当時会員の一部の方々の寄附を得まして細々乍ら今日まで会を存続して来た様な訳であります。こゝでそれまで盛会であつた当会がどうして急にこんな状態になつたかについて既に御承知の方もあるかと存じますので玆で簡単に御説明申上げますが丁度今から一年半前の昭和四十二年の十一月三十日に突然に岡山県の玉野市の警察より警部補以下四名の係官が家宅捜索令状及び私に対する逮捕状を持つて参りました。そして私は玉野警察署に一週間も留置されその上、岡山地検に身柄と共に送られてこゝで三日間留置され揚句の果ては当会の過去に発行した会誌同好の81／82号より89／90号の五冊の中にワイセツ文章が十七箇所あると指摘されて、略式命令で即決で罰金五萬円也を言い渡され私も種々言い分もありましたが、前後の事などを考慮しまして止むを得ず岡山市の知人より金五萬円也を借用してこの事件を完済して来ました。こうしてこの事件は手入れを受けてより罰金納入して全てが解決まで僅か十一日間で終つた訳であります。事の起りは岡山市内のゲイバーの路傍と言う店が少年をアルバイトと称して雇い入れお客に売り付けていた為に手入れを受け家宅捜索を受けた時にそこに当会の会誌があつたのが発端だと言つておりましたが、特に田舎の警察であり余り同性愛とかゲイバーとかについても知識がなく当会なども同じ様なことをしているのだろう位いに思つて意気込んで四人連れでやつて来て私を一週間も留置して徹底的に調べましたが唯のワイセツ文章頒布販売と言う事だけしか立件出来なかつた訳であります。それも各会員の方々もこの文章をお読みになつたと思いますが、あの程度のもので特に目をそむける様な露骨なものは何もありません。むしろ最近の週刊誌あ

たりの方が却つて露骨な事を書いているのが現状であります。以上の様な事件と言えば事件ですが全く災難に会つた訳であります。然しこれは私に言わしめれば逆に当会があれだけの日数と人員をかけて調べて見ても何も出てこない結果は文章だけの問題であると言うことで、如何に常日頃本会がガラス張りで運営されて来ているかの証拠だとも言えます。然しこゝで困つた事はこれに依つて会員の方がこの評判を聞いておそれをなしてか、全然通信して来なくなつたことです。それ以降直ちにこの事件に関する報告書や追加名簿と続いて昨年の秋には財政の苦しい中から九周年特集号（清心）と追加名簿も一緒に発行致しましたが、会費はおろか通信一つ寄越して参りません。私は今迄申上げた様にこの事件は全くの災難で誰れを責める訳にも参りません。然し一番苦しい目に会つたのはこの私です。それにも負けず私はまだ同好者の為に立ち上ろうとしております。それにも不拘今迄ちやほや言つて来た人迄がこの為に一通の慰めどころか何の通信もして来ない、まして当会より苦しい中から会誌其他を送つても平気な顔をしているのです。私はもうこんな人達と親しくしたいとも思いません。人間は人間らしくあり度いと何時も心より願つております。以上が事件の概況と今日までの経過です。幸い近頃は入会者もぼちぼち増加して参りまして会誌も以前の様に二ケ月に一回は必ず発行する積りでおります。今まで現況を報告しないまゝで大変不信不安をおかけ致した事と存じますが御了承下さいまして今後共宜しく御協力の程をお願い申上げます。今まで当会も会誌の発行もせず充分な活動も出来ていなかつたのですから、今までに会費の多額に滞納になつておられる方は、納入して頂くに越した事はありませんがそれは御自由意志にお任せすると致しまして本年の七月分からは月額三百円也の割合で必ず納入して頂く様にくれぐれもお願い申上げます。

☆☆☆　　☆☆☆　　☆☆☆

田舎のおつちやんムードの四十才以上の肥満体の人を求めます。若い頃は父親に甘えたい様な気持ちもありましたが現在は親孝行して上げ度い様な気持ちです。決して負担はかけません。よいお便りをお待ち致します
当方三十才　中肉中背で水商売自営です。
大阪市　三〇三三番

生いたち

横浜市 青山生

今まで私の心の奥深く秘めて他の誰にも察知されずに来たものを私が父親とも思える人に訴え、甘え、慰さめてもらい指導してもらおうと決心した次第です。

この手紙どのくらいの長さになるか見当がつきませんが子供の我儘と御容赦下さいまして、最後まで御読み下さつて、お導き下さい。

これは僕の禁断の性の告白と云うべきものです。普通の人にとってはこれは異常なことですが、これを毛利さんに訴えて自分の気持ちを落着かせたいと思いましたので思い切つて自分の心の奥にひそんだものまで、子供の頃の気持ちまで思い出しながら書いて行くつもりです。

僕は二人の娘の父親ですから若くはありません。しかし僕は自分に父親を感じさせる様な人にしか性的な衝動を感じなくなつてしまつています。不思議に思われる様ですが、五十五才以上の男性で、白髪、半白、禿、黒髪は問わず清潔で上品で誠実で、父親らしい包容力と権威が感じられる人であれば抱かれたいとか、抱いて世話して上げて孝行したたと言うような気持ちと共に性衝動が起きるのです。

自分の妻の乳を吸いたいとか、なでさすりたいとか云う気持が起きないのに、父親の様な人にはそうゆう気持が起きるのです。変態性欲です。悲しくなる程切ないのです。

僕は南の軍港S市に生れ育ちました。海兵団の軍楽隊の奏するマーチや、軍歌が何時も聞えている街でした。僕の父は僕が小さい時死にましたので、顔は覚えていましたが抱かれた経験もありません。父より母の方がすぐれているとは子供心にも分つていた様でした。父を尊敬しなかつたと思います。級友の立派な父親を見ると羨ましく、友人の父親である立派な海軍中佐や、白い診察服を着た病院の医者など、憬れて見とれていたものでした。

僕が一年生に入つて、級友の仲良しが出来た間もなくの頃でした。勉強の良く出来る東京弁の子供が、父親が欧州航路から帰つて来たから遊びに来いと誘つてくれました。

広い官舎の庭には芍薬の花が咲いていました。座敷では夫婦差向いでビールを飲んでいました。湯上りらしく父親は浴衣の前をはだけて座つていました。多

分海軍中佐だとか言つていたが、顔は黒かつたが額は日焼けせずに少し禿げ上つた丸坊主の頭はピンク色にテラテラに光つていました。

綺麗な優しい奥さんでした。友達によく似た顔立をしていました。

友達が「只今！」と云うと、「坊主、帰つて来たか」と父親は云い。「おかえりなさい、よくいらつしやいましたね、貴方がた手を洗つていらつしやい」と言つて、奥さんは女中にケーキと紅茶を持つて来る様に云いつけました。

僕はケーキは初めて食べるもので珍らしかつたのでした。

友達は久しぶりの父親にはにかんだのか、母親にばかりまつわりついていました。

母親が座ると其の上に座りました。「澄夫、俺の処に来い！」「澄夫、俺の膝の上に座れ」と父親の中佐が何回も呼びましたが、友達は知らん顔をして母の膝から動きませんでした。

「澄夫は律子の子だねーよし俺の子は君だな？」と言うと中佐は軽々と僕を抱えて僕を胡坐の中に座らせました。

石鹼の匂い、煙草の匂い、酒の匂いの混じつた男の匂いがしました。母親の匂いと違う暖かい感触が僕をうつとりとさせました。最初は恥かしく固くなつていましたが「ビールを取つてくれ」と言われれば立上つてビールをついでやり、肴を口ひげの大きな口の中に入れてやつたりしました。暫くするとすつかり嬉しくなつてしまいました。まるで今迄出来なかつた親孝行をしているつもりで肩を叩いたり、揉んだりしてやり、「気持よい？」と言うと「うん、気持よいぞ！　ワハハハ　気持よい、気持よい」と父親はうれしそうに笑いました。

中佐もほうびに、カマボコやカラスミなどを僕の好きなのを聞いて僕の口の中に入れてくれました。胡座の中に座つていると耳元に絶えず酒臭い中佐の息吹がかかつていましたがそれが僕には反つて気持がよいのでした。触れる度にザラザラする　の感触も僕に父親の存在を身近にさせました。ケーキや紅茶を食べたり飲んだりすることも楽しかつたが、それより中佐に食べさせたり食べさせてもらう方が楽しかつたのです。

前のはだけた胸の毛は中央に筋の様になつて臍の下の下腹まで続いていました。おさしみを喰べさせた時、醬油が胸元に落ち乳首の処まで流れて行きました。僕は慌ててそれを口をつけて吸いました。

僕が胡座の中に踏み込んだ時、柔らかいグニャとしたものを踏みつけ、ザラザラとした毛の様なものが足にさわりました。何か悪い事をした様に一寸僕はひるみましたが、中佐は何とも言いませんので其のまゝの状態で中佐の胸に顔をうずめていました。醤油の味はなんともいえないおいしい味でした。(其の時から性的な異常感覚があつたかも知れません)

「澄夫がお母さんのオッパイをしやぶつているので、友達がお父さんのを吸つてくれているぞ!」

中佐が大きな声で言うので僕は恥かしくなつて向き直り胡座の上に座り直しました。友達は母親の胸をはだけ両手で乳を揉みながら乳首を吸つていました。友達は知らん顔をして、それを続けていました。

「君は僕のオッパイを吸うんだよ、君は俺の子だからね」

「名は何んと云うの?」

「Sか、よしよし、S、さアおれのおつぱいを呑ませてやるぞ!」と云つて、軽々僕を抱き上げ向きを変えて股を開けて抱き込みました。

僕は中佐の胸に顔をうめ、乳首に口をつけて吸いました。何とも云いようのない匂いと体温にうつとりとなり、今まで感じたことのないやすらぎを感じました。

片手で胸をいじつたり混じつている白髪を引つぱつたりしました。

「くすぐつたいもんだのう! ウツウツウツ こいつ痛いぞ ワッハハ!」中佐は腰をピクピク動かして笑いました。暫くすると「今度はこつちのオッパイだ!」だと中佐が言つて片方の乳を吸いました。片手でいじると元のおつぱいは濡れて赤く乳首が大きく固くなつていました。

乳首をかんでみました。

「坊や、いたいぞ! ウハハハ」と笑つて恐りませんでした。僕はおとうさんと言つて見たくなりました。

気がつくとお臍の引込んだ穴の中が黒いものが一杯つまつていました。僕は指をその中に入れて掃除し始めました。「ワッハハ ワッハハ ワッハハ 臍を掃除してくれるか?」と中佐はうれしそうにしました。そつと掃除した後をなめると塩ぱい様な味がしました。

中佐は僕を抱いたまゝ何回も便所に立ちました。其の度に僕のお尻の下でシヤシヤと小便の音がしていました。

僕は何時迄もこうして抱かれていたいと思つていました。夕方近くなつて、電灯がつく頃になると「もうそろそろ家に帰つたらよくない? 家で心配するといけない

わ！」と奥さんが言いました。

「もう一寸いゝじやないか！」と云つて中佐は立上つて帰ろうとする僕に「いゝだよ、もう少し座つていな」と言つて僕の腰をひく様にしました。僕ももう少し遊びたいので「はい」と言つて調子をつけてドシンと中佐の胡坐に腰を下ろしました。中佐が「痛いぞ坊主！」と云つたので僕は思わず腰を浮かしてみると、亀頭が赤紫に膨れた男根が褌から外れて立つていました。僕の尻がぶつかつたせいではれたのだと思い悪い事をした気がした。中佐は腰を浮かす様にして片手でそれを越中褌の中に入れようとしましたが、それはすぐ褌から外れて出てしまいました。褌がゆるんで片寄つているのに腹が出ているのでよく見えないせいでしよう。中佐は僕から手を放して立ち上りました。男根は僕の目の前に大きく立つていました。僕は勃起した男根がどうゆう意味を持つているのか、まだよく知りませんでした。大人のそれを銭湯などで見ていましたが、大きかつたがダラリと下つたものだつたのです。それにそんなに注意して見た覚えがなかつたのです。勃起したこんな巨大なものは初めて見たのです。僕のと比べておじさんのは何んと赤くて大きいものだと思つたのです。

今でも覚えている処をみると好奇心が強かつたのは確かであるでしよう。余程印象が強かつたと思うのですが性的衝動があつたかどうかは覚えて居りません。

其の時、奥さんが中佐の様子に気がついて「あら、まア、あなたつたらホッホッホッ　いやね・・・ホッホッホッ」と笑い出しました。口に手を当てて僕の方を照れ臭そうに見て笑いました。片づけものをしていた女中も部屋から逃げ出しました。中佐はそれなのに少しも恥しがりもせず、隠しもせずに「麻羅が出ていたか！」と悪びれませんでした。ゆつくり褌を外してダラリとした睾丸まで出してから褌をやり直しました。褌が帆を張つた様になりましたが今度はうまく収まりました。終始裕然としていましたので少しもおかしくありませんでした。

浴衣の前を合わせて便所に立つて行きました。僕は子供心にも偉い人なんだなアと感じ取り益々好きになりました。強烈な印象を僕に残して間もなく其の一家は横須賀へ転任になり去つて行つてしまいました。

月日が経つと其の友達のことも何となく忘れて・・・近所の呉服通の子供と遊ぶ様になつていました。暗い土蔵の中で隠れん坊をしてよく遊びました。二年生だつたが其の子はませていて大人から聞いた遊かくの話をよく

話してきかせましたが、僕は其の話を全面的に信じませんでした。

其の日はどうゆう具合でそうなつてしまつたのか知りませんが、近所の女の子を寝かせてお医者さんごつこをしていました。男の子が五、六人で取囲んで股を開かせ陰部に蜜柑の汁を入れていました。女の子は股を開いたまゝ入れるにまかせて、それを男の子達が凝視している中で僕の友達がコップの液体を注ぎ入れているのです。物も言わないで陰部をのぞき込んでいるのを、僕はいやな気分で逃げ出したことを覚えています。

僕は恥かしくて覗けませんでした。男女間の性の話は不潔なものとして口に出すことも、性器の名前も口に出してはならないきびしい躾で育つて来た僕には身ぶるいする程いやらしい事だつたのです。

小学校の隣りに女学校があり登校の途中や下校の時よく女学生に追いかけられて逃げ帰り、時にはこわくて学校を休んでしまつた事もありました。そのくせ姉達におぶられたり隣りの女の子と遊んだりしていました。母親は女は不浄の者だ！と何時も云つていました。月のものが出るから男より汚れていると云うのだつた、信じるようになりました。

二年生になると薬屋の子供と遊ぶ様になりました。宿題を一緒にする様に頼まれて放課後よく行くようになりました。僕は算術が得意だつたので何時も自分のを早くすませて友達のを手伝つてやりました。

初夏の暑い日でした。僕達は宿題がすんだ後、広い湯殿で水をかけ合つて遊んでいました。

其の時友達の父親が裸になつて入つて来ました。肥つていて下腹が出ていましたが、背が高く、色が白く、目が二重瞼で大きく鼻下に赤味がかつたカイゼル　をピンとさせていました。胸毛も赤味がかつてちゞれていて血色がいゝので、まるで西洋人みたいでした。

「こいつらいたずらだな！身体も洗わんで悪戯ばかりしちよるんだろ！」と言つて僕等二人は忽ち捕つてしまいお湯を運んだり背中を洗わされたりしました。僕は友達の父親の背中を石鹸つけてゴシゴシと丁寧に洗つてやりました。御湯を何杯もかけて流してやりました。僕は親しみが持てて好きになつていました。

それがすむと僕等を洗つてくれました。友達を胡座の中でくるくると廻しながら石鹸をつけたタオルでごしごしと「痛い痛い」と云うのをかまわずにこすり、場所によつては友達はケタケタと笑い身をよじつてあばれるの

を構わず擦り、洗い終るとポンと尻を叩いて「一丁上り！」と解放しました。

僕も友達の父親の股の間で身体を洗つてもらいました。身体がぶつかり合うのが、体臭につゝまれて至極いゝ気持でした。僕の局所を洗う時、「胡椒ちんぽ！」と言つて僕の局所を引張りました。

「おちんちんはきれいにしなきゃア」と言つて石鹸をつけた手で基処を洗われた時は思わず身をよじつて大声を上げました。

友達の父は「クックックッ」と笑つて股の間や腋の下をくすぐつて来ましたので僕は苦しくなつて大あばれして逃げ出しました。友達は僕に加勢しましたので二人で友達の父親をくすぐりました。父親は仰向になつて足をバタバタさせて「降参降参」と言いました。下腹と局所がすぐ目の前にあり、だらりとした男根と睾丸がゆれ動いていたのが印象的でした。

それからあまり其の父親と顔を合わせる機会が少なくなりました。

或る日、近所のお神さん達の井戸端会議が耳に入りました。

「薬屋の旦那はこの頃、あの後家さんの家に夜這いに行きよらすとよ！」

「夜這いじゃなか、昼ばいたい。朝ぱらから旦那の下駄がぬいであるけん！」

「子供達が学校に行つたらすぐ来よすとけん、帰る時刻も皆んな知つとらすとよ！二時間も居らすとけん！」

「前はお妾さんの家に行よらしたとよ、助平じやけん」

僕は　舌の女達が憎かつた。嘘ばかり言つとる！

女達の卑わいな笑いに不潔感を覚えたのだが、薬屋の友達の父親には、それが感じられなかつたのです。

薬屋の二階に海兵団の水兵が下宿していました。友達の話では伊万里の叔父さんと云うことであつた。

或る日友達が見えなくなつたので二階まで捜しに行くと、その水兵が寝巻のまゝ階段の処に立つていました。

「チョコレート好きかね、キャラメルもあるよ、俺ん処に来てみんしやい」と云いました。

部屋に入ると蒲団が敷放しになつていて、男臭い汗の匂いが漂つていました。あまり好きになれなかつた。彼はチョコレートとキャラメルを僕の両手に一杯になる程くれ、蜜柑も大きいのを「食べんしやい」と三つもくれました。僕がチョコレートを食べていると、「蒲団の中で遊ぼうや！」と言つて僕を蒲団の中に入れ、自分も這入

つて来ました。すぐ僕の腰の処に手を廻し久留米絣の裾から手を入れ、背中の方からパンツの中に手を入れて来ましたので僕は吃驚しましたが、僕が逃げると悪いと思つてじつとしていると、お尻の穴の処や前のチンポの処まで触りだしましたので、僕はどうしようかと思いました。何かいやな事をされる、漠然とした危機の予感がしました。「小便したかけん、便所に行つて来る！」と言つて蒲団から抜け出し逃げて家に帰りました。

其の事は誰れにも話しませんでした。今から考えてみると、其の人が父親の様な柔和な身綺麗な上品な人ならどうなつているか分らないと思いますが、三十才位の人だつた様な気もしますが、好きになれませんでした。其の後、友達の家に行くと其の人が居るのでこわくて自然薬屋には遊びに行かなくなつてしまいました。

僕の方からでなくても女友達が自然に出来ましたが、僕の方は無関心と云つてもいゝ水の様な交際でした

男の友人も同様であつた。何の興味も湧く様なこともありませんでした。性の事を露骨に言う友達も居ました。僕よりはるかに性知識があり、色々のことを教えてくれるのでしたが、僕はそれを信じませんでした。僕は中学生になつてからも、天皇陛下が皇子や皇女を生まれるのは、天皇が皇后に手を触れられただけで御妊娠されるのだと信じていました。

又、子供が生れる時、お母さんの臍の下の筋のある処が割れて子供が生れるのだと真面目に信じていました。

僕が小学校に入学する前だつたと思いますが、近所の女の人が市の衛生展覧会に行くので僕を貸してくれと言つて背負つて行つてくれた時のことです。今から考えれば、それは性病啓蒙の展覧会だつたに違いありません。帰つてから其の女の人は野卑な笑を浮かべて母の前で言つた。「Sチャン　どんなのがあつたか言つて御覧よ」「チョンペの大きなのに、大きな手が指さしとつたよ」と僕が云つたので二人共、身体をよじらして笑つたのです。性病にかゝつた女性器だつたのに違いない。僕は其の時、母親やその女の人に何時までも笑われることに恥かしさを感じたのが強い印象が残つているのです。汚ならしいと言う印象だけで現在は其の展覧会のものは何一つ覚えていないのです。中学校の二年生になつた頃だつた。僕の家から半丁程離れた河に向つて立つている旅館がありました。

小学校は違つていたが中学校になつて友達になつた家だつたのですが、初めてライス・カレーと言うものをご

馳走になつて世の中にこれ程おい・いものがあるかと思つた家なのです。或る日の午後、友達を訪ねると、丁度留守だつたので帰ろおとすると「まア上つて、見せたいものがあるけん！」と友達の父親はニヤッと笑つて居間にある切ごたつの処に連れて行きました。親父さんは箪笥の中から葉書大の写真を三十枚位と薄絹の畳んだのを五、六枚、僕の前に出して見せました。絵はひろげて見ると、どれも男女のそれもちよんまげをした昔の男女が不自然な姿態で性交渉をしていました。物すごく大きな男根が赤い女陰の中に挿し込まれているのです。写真は色んな体位の男女の交接の写真でした。裸の男女が上からや下から尻からとか、初めてどちらも見るもので、ドキドキして目によく入らぬ位早く見ました。其の内の一つはカイゼルひげを生やした年配の全裸の男性が大股を広げて悠然と椅子に掛け、若い女性が勃起した男根を両手に捧げて入に入れようとしているのです。

　異様なショックを受けました。この威厳ある大人がこうゆうことをするのだろうか、世の中に一体こうゆうことがあるのだろうかと思いました。

「おゝ、立つとる、立つとる」と其の時、親父さんは僕の股間に手を入れて息子にさわつて言いました。恥かしさのあまり「帰ります」と言うなり僕は其の家を飛び出しました。辱しめを受けた様な気持でした。

「ワッハハハ、ワッハハハ」と笑う声が後でしていました。

　二年の昇級前だつたかどうかはつきり覚えていませんが、友人と大村の師範学校を受験しました。学科試験にふるい落されて半数位に受験者の数が減少していました。いよいよ三日目の身体検査でした。僕は身体がやせて小さく、受験生の内では一番小さかつたかも知れませんでした。それでも耐力テストでは運動場の十周も最後まで耐えしのぎました。午後は身体検査でした。身長測定でも体重計量でも自分自身の肉体が貧弱なのに恥かしい思いをしましたが、視力検査だけは一・五（両方とも）でいさゝか得意でした。

それぞれの検査場に矢印と番号がしてありましたが⑥番の処は個室になつていて、白いカーテンが下つていました。中から友人がパンツを上げながら出て来ましたので「何する処や？」と聞きますと「痔の検査ばするところや」と言いました。

「次、入れ！」と言われたので「入ります」と言つて入口で丁寧にお辞儀すると白い医者の上衣を着た五十以上

の年配の人が居ました。柔和でツヤツヤした赤顔をしていて、ひげが生えていました。僕はどんなことをさせられるだろうと思つていましたが、いさゝか安心しました。「さア、パンツを下げて白墨で印しをつけてある処に手と足を置いて四這になるんだよ」と医者は言いましたので僕はパンツを下げて床に印をつけてある処に手足を置き這いました。「お尻を上げるんだ」僕は無防備でお尻を医者の顔の前につき出すのは恥かしさのあまり気が転倒していたのですが、医者は構わず僕の尻の穴を指で開いて検査し、それから指か何かの棒かを突込みました。激痛が走りました。僕は痔ではないのに？
「よし、今度はこちらに来て座るんだ」其の時医者は消毒薬の入つた洗面器で手を洗つていました。僕は尻の中に異物が入つている様で気持が悪かつたが、医者の前にある丸い椅子に腰を下ろした。「もつと浅く掛けるんだよ」と言つて医者は股を開いて椅子をずり寄せたので僕の膝は医者の股の奥の処までとどきました。医者の息が僕の顔にかかつて父親らしい匂いが消毒薬の匂いに混じつていました。ふと海軍中佐の男臭い匂いを思い出し安心感が湧きました。パンツを下げて誰れにも見せない処を見せているんだと恥かしさと不安がこの人ならと思つていくらか薄らぎました。

医者の白い手が股間に延びて来て大きな掌の窪の中に僕の小さなチンポと睾丸が乗りました。重さを試す様にそれは二、三回上下動を繰返されました。それから右手で僕の蔭茎がギュッと握りしめられ、根元まで一気にしごかれました。僕の小さな亀頭が露出し、逆むけになる位になり、僕は思わず飛び上りそうに痛くて腰を浮かして我慢しました。僕はどうしても合格しなければならないと思つていました。医者はそれを五、六回繰返しました。僕のピンク色の亀頭は赤く充血して来ました。握られた処もいたいが亀頭のつけ根のいたさはひりひりと引張られた様な痛さが残りました。最後に亀頭を指先で強く圧して先の中を開いてみて「よし、君は性病にかかつていない！」と言いました。

僕はパンツを穿きました。尻の中に何か入つている様で気持悪い上に、チンポが立つてしまつてパンツ一枚の裸で試験場を歩くのに困りました。立つているのを右にやつたり左にやつたり、人目につかない様に蹲居した様な格好で歩いたりしました。それから僕のチンポが気になつて、帰りの汽車の中でも静まらせる為に静かにしているのだが、其処はやけつく様にヒリヒリと暑く痛く立

ち通しでした。熱をもつている様に熱かつた。友達が話しかけても上の空でした。友達はあんなことをされても何ともなかつたのだろうか。僕だけ異常なんだろうか。僕は恥かしくて友達にも聞けなかつた。

結局、師範学校は不合格になりました。虚弱児だつたので仕方がなかつたのです。

その頃級友達は「チンポ」に毛が生えたと言つて騒いだり中には見せ合う者もいました。僕は不きんしんな！と怒りを感じて彼等を軽べつし、彼等が性的なことを話題にしても仲間に入らなかつた。

しかしそれから三年経つた頃には僕にも陰部に細かい毛が生えて来ました。他の者達より三年遅れていました。その頃自分が他の者と違つている事に気がついていました。彼等が話題にするのは若い女の子か女優が対照であるのに僕はそれ等に関心がなく、自分の父親位の人、教頭先生、校長、校医だとかしか関心が向かないのです。銭湯に行つた折、自分の父親位の人で上品な人や、ひげなんか生やしている威厳ある人を見るとその身体を盗み見、其の綺麗ななめらかな肌にさわり、抱かれて乳首を吸いたい、と思い、其の人の少したるんだ様な下腹や柔らかそうな陰茎やだらりと下つた陰嚢を見るとさわつてみたいと思い、僕自身の陰茎が勃起してきて困る様になりました。僕は変態性であることがはつきりして、おそれ悩みましたがどうすることも出来ないのです。

或る日蒲団の中で腹這になつて本を読んでいると局所が勃起してきました。それを蒲団にこすりつけるといい気持でした。僕は幼い頃の海軍中佐の身体を思い浮かべました。中佐の身体に自分の身体をこすりつけているつもりでした。

柔らかい胸毛、固くなつた乳首、体臭、局所を踏みつけた感じ、尻に当つた男根、褌からはみ出た麻羅、みな思い出し、あの悠然とした中佐と抱き合つたと想像すると僕は一度にけいれんするように射精してしまいました。パンツをぬぐと、白いドロドロとしたものが内股や下腹とパンツをべとべとにし汚して冷たくなつていました。其の時初めて白いものは性液だと感じ取つたのです。パンツをこつそり取替えると汚れたのをゴミ箱に捨てました。

入会のあとさき

大阪　二六四八番

新会員の感想として、以前の会誌に掲載されてあったが、共感して読んだものだ。

再度、僕なりの気持を書いてみる気になつた。当同好会を知る迄の僕は、同病の人と知り合つて色々話し合いたい、誰か友達になつてくれる人はいないものかと、悶悶とした気持になる事が度々であつた。又、その様な本をあさつて歩いた。初々しい少年達をみると、あの少年この少年との夢画いてみたり、あまつさえ多少の小使いをあげても友達になつてもらおう（それも夢にとどまつたが）等々。以前、或る信頼していた先輩に、自分のこの女性に興味の持てない事について相談した事がある。その人は、苦労人らしく言葉少なに聞いてくれた。そして、「君はまだ、その年迄童貞なんだね」と嘆息まじりに聞いたものだ。所詮、僕の心の救いとはならない儘だつた。

そんな才月が積つて、昨今、自分の心境を、一きよに実践する事に思いいたつた。それは衝動に近いものであつた。三流新聞の広告を目あてに東京へ遊びに行くことにした。いさゝか非活動的な自分であるけれども、此の際、何であれ、自発的な行動こそが男子としての人生ではないか？そんな心意気も沸いてくる。

入会金と会費で三千円、紹介された少年にこゝろざしとして二千円払う。少年に会つて一体これからどうしたものであろう、一緒に寝る事迄は聞いてないが、この場にのぞんでちゅう緒してもはじまらない。四、五時間後には帰阪の予定である。「一緒に休憩する処を知らないか？」と云つたものだ。その少年は、ものなれた態度であつた。すぐ、旅館におもむいた。初めてのことで、多少ふるえながら少年の裸を抱いた。乾ききつた喉が水をむさぼる様に。

けれど、自分が本当は永続的な愛を求めている事を、あらためて思い知つた。しかし、不本意ながら未知のものにぶち当つた行動の成果は得られたわけで、それなりに征服者？の感動があつた。

その時に、F・K誌の事を知り、帰阪してから古本屋で捜し出した。大阪に同好会があることを初めて知つた。最初、電話をした時は事務所を閉めた後であつた。次の日、当事務所を捜し当て、近辺を二、三回徘徊？して中

へ入つた。その時の僕の気持ときたら、絶望の淵に沈む者の心境であつた。が「その時、僕は考えた」過去の自分をふり返ると入会せざるを得ない。真面目な会の様だから、思い悩む自分を見極めるには、とことんまで自分の宿命を知ることであろうと。」ノックして中へ入つても言葉が出ない、毛利先生が気を利かしてくれたので助かつたし、安心もした。入会用紙に記入しても困りの会員の方が非常に気はなる。先生の催足にうながされ入会させていただいた。」

それとなく捜していた浮草の如き心の月日、それは漠然として永かつた。

入会以前にも、一、二のプロの人と知り合つたことがあるが、その時のみであつて金銭的に大分負担となつた。話し合う人は一人もいなかつた。当然、発散されない心は性格にきざまれていつたであろう。事務所での雑談でさえ楽しめる現在、僕にも仕事の面やその他にもやるべき事が一杯あるが、当会がもつと発展し、維持費に困る様な状況を早く脱される様願う。同志は沢山いるし、可能性は充分あると思う。それには会員各位がホモ的関係の他にも、例えば、趣味等でのつながり、相互に楽しめる母体を作る。やすい会費ですから、自分なりに色々考えて楽しい会としたい。歌の文句にも　幸（しあわせ）は歩いて来ない・・・・」。と

大阪市　二六四八生

☆☆☆　　☆☆☆　　☆☆☆

在籍七年の会員です。本会の事は私が一番良く知つていると思つています。年下の弟か兄の様な人を求めます。岡山県の生れですがずつと大阪に住んでいます。中肉中背で会社員です。二十六才　文通にも応じます。

大阪市　三〇一二番

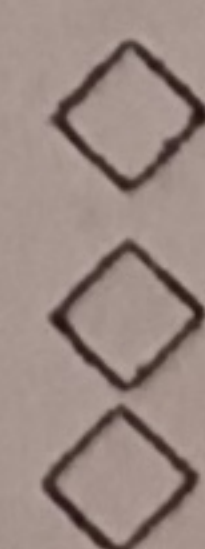
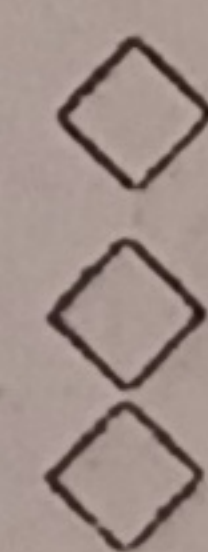
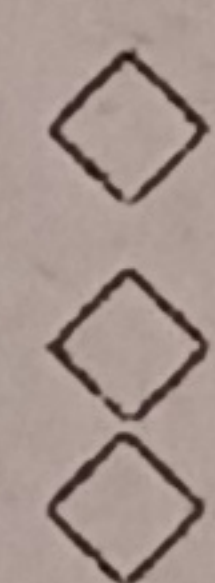
父親のムードを求めたい青少年を求めます。特に音楽（クラシック）興味を持つております。一度話し合つてみませんか？　今迄交際した人は皆良かつたと言つている様です。

中背、やゝ肥満　会社役員　五十二才

大阪府　三〇〇二番

「少年を」

大阪市　森本　ひろし

ボクは早速少年の跡を追う。こんな処で会うなんて全くの奇遇だ。早速アパートに誘つてやろう。「兄さん、いいなア、ボク兄さんに激しく扱われたら最高だよ」と白い、滑らかな手首を自分で後ろに回して革バンドで縛らせ、紅潮した頬を寄せ胸を汗ばんだボクの胸に押しつけて来た少年、　才だと云うのに一人前に成熟した彼の陽物は　々とした叢みの中で一際立派なのに、少年は常のゲイたちのようなペーゼを求めはしない。靴下で根元を縛り上げ、ボクの掌の中に香り高い粘液を吐出させる間、少年の両手首は彼の背後で厳しく縛りつけられた儘だつた。「ボク兄さんとなら、締め殺されたつていいねえ、兄さんの持つてる写真や雑誌見せてよねえ」少年は両手足を尻の上で一ト纒めに縛られ、グイと上に持上げられると絶え入るような喚声を洩らし、硬直させた太腿の間から、再びスペルマをシイツの上に噴出させた。「ほんとうに、マゾなんだナ」「兄さんにだつたら誰だつてこうだよ、もう一ぺん縛つておくれよ」細面の、濃い眉の圓らな瞳は、数回のエレクチオンに対しても些かの濁りも見せず、若さの故の健康美を澄んだ視線に宿して、ボクの顔を直視する。だが、それが仕事の少年とは立場が違うボクのボデイは、最早、このしなやかなムチにも似た少年を責めるだけの精気は乏しかつた。「次の時に、拷問の写真を見せてやるよ、ううん、きつとだよ」と別れを厭う少年をやつとのことでふり切つて、アドンスを去つて二日目、少年は、真紅のポロシャツ、ピッタリと脚線を露わにした白いズボンに若者らしい、イキな赤線入りの白いバスケットシューズ、長い髪の毛を右頬のホクロの上まで垂らして、つい今しがた、ボクとすれ違つて行つたのだ。商店街を抜け、人通りがまばらになつた辺りでボクは少年の肩を叩いた「君イ」ふり向いた少年の顔は正しく、あの一夜の奴隷少年だつた、が、少年は無感動に言つた。「何ですか」、丁度その時、パトロール中の巡査が近附いてくるのが見えた。「クロキ君でしよう」、ボクは先夜少年から名前を聞いた幸福に感謝せずにはおれなかつた。ポリスはボク達の傍らを微笑しながら通りすぎて行つた。「何の用ですか?」、今度はボクが驚く側だつた。「ボクは・・・」はあ、そうだつたのか、と合点した。―兄さんボクはね、小さい頃

悪人に誘拐されて空き家に丸裸にされて縛りつけられ拷問される夢ばかり見てたの・・・ーと話してたつけ、それ、少年の前をごらん、まるでポケットにピストルを入れてるみたいじやないか・・・。ボクは頭を働かせて言つた、「実は、君にお見せしたいものがあります。ご一緒にお越し下さいませんか？」「ボクに？・・・、あなたは？一体」「来て頂けば判ります。さ、どうぞ」ボクは芝居がかつた言葉つきで、その実、躍り出したいような心地で少年の手首を握り歩き出した。「止して下さいよ、助けて・・・」少年は明らかに狼狽した声でつぶやくように言つた。少年のヒタイにはあの日の夜のように汗ばんでいた。「黙つてついて来い」ボクはわざとドスを利かせて少年の耳元に囁いた。アパートのドアを後手に閉めてから、ボクはポケットからハンカチを出すなり少年の歯の間にねじ込み、両手を臀の上で束ね、左手で固く握り右手で少年の陽物をズボンの上から愛撫しようとしたが、少のズボンのポケットは硬直した儘「？」少年の瞳は恐怖と恥らいに激しくおののいている。「？」ボクはそうそうと歯の間のハンカチを引き出した。「君アドニスの・・・」「・・・だろ？」、少年はハッとしたようにつぶやいた、「ア、？　あそう、ボクたち双子なんだよ」。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

裏切られた恋でも愛した人との想い出は楽しい

会社帰りの人があわただしく往来する中を傘を差しながらもう三十分も待つている。一ケ月前の約束を、別れしなの何度も何度も今日の約束を念を押して去つていつたあの時の言葉を、顔を想い出しながらきつと彼は来る、そう信じながら雨の中を一人待つている

○○○番

可哀そうな君！

こう云う言葉を知つているかい？　与えるものは幸いなり　僕も何度か裏切られた想い出を持つている。でも、でも僕は自分が裏切るより裏切られた方が気持がらくである。

二六六四番

未入会者に告ぐ

毛利晴一

同好者は誰れもが自分の好みに合つた理想の相手を求め度いと云う気持は必ず一様に持つていると思います。その欲望はその人に依つて多少の差異はありましようが可成り強いものであります。だがそれが容易に満たされない為に日々の生活に意欲を失くしたり、又はもんもんとしてノイローゼになつたり、或いは夜の公園をさまよつたり、映画館に入り浸つたり、駅の公衆便所に盛んに出入りしたりする訳でありますが、よく考えてみるとこれは大変な時間と金銭の浪費であり、その上に大変不体裁なことでありそして大変に危険な事でもあります。今までにこうした場所に出入りして悪い人間にひつかかつてひどい目に合つた人は可成りおられる筈であります。又悪い同好者でなく当局の手にかかつて大恥をかいた人も相当おられる筈であります。それでも尚、相手を得る為にそれ等に出入りすることが止められないと云つた人達が殆んどではないかと思います。然しよく考えてみますと悪い人間にかゝつて何十萬円もおどし取られたり、当局の手に挙られて調べられたり、した事を他人の事乍ら思い浮べると身ぶるいをする思いが致します。生れ乍ら性癖だと言つてしまえばそれまゝでありますが、こんなみじめなこんな危険な一つあやまれば家庭を破壊し、職場を失う様な事を繰り返して同好者は生活して行かなければならないのでしようか？そしてこうした生活を自己を正しく伸ばし社会生活に活を得て行くことになるのでしようか？ 私は過去の長い間同好者のこうした状況を目のあたりに見て来まして、なんとかしてもつと安全で浪費のない然もお互いに進歩のある相手の求めようの出来る組織を作るべきであると思つて、丁度十年前に本会を創立したのであります。自分の事を体格から職業、趣味までそれに好みつまり理想とする年令やタイプまで堂々と発表し然もそれが何千人の人が発表され、その中より好みを撰ぶことが出来る。然もそれ等の人達は皆んな善人であつて何の危険もない全く安心して交際が出来る。そして自分に心配事が発生したら会の事務所に出かけて他の会員の人達とも相談が出来る。こうした結構な組織が既に十年も以前より存在しているにかゝわらず未だに入会もせずに一人で悩んだり危険をおかしている人の多いのは全くおろかと言わねばなりません。私は親切

で入会をすゝめているのであつて決して営利でやつている訳ではありません。この事は既に入会しておられる、特に古い会員の方々は充分に承知しておられる筈であります。この実績がこうして十年間も続いている訳でありますから、今更何のちゆうちよもいりません。一日も早く入会して心を安定してそして毎日に仕事に精を出して下さい。

☆☆☆　☆☆☆　☆☆☆　☆☆☆

愛とは傷つき易く澱み易くこわれ易いものだ。傷ついたり澱んだりこわれる多くの素因は他人の中傷が多い。そんな事でこわれたりする愛は一人一人の相互理解と信念がないからだ。

悪の紋章より

愛すると言う事はどれだけ相手の犠牲になるか、又俺が相手よりの要求にどれだけ犠牲になれるかだ。

僕は絶対に　浮気はしない!!
と云つたら
貴男は怒つた調子で
御前の様な浮気者が、今後
浮気しないで辛抱できるか !!
との強い言葉
それ程、僕は信用されていないのかと
悲しくなります
昨日だつて　今日だつて
一人で過した淋しさは
貴男には　理解して頂けないのでしょうか

連載㈢　ノンフェクション・シリーズ

若き理容師

東京　K・E生

「テレビをつけて」と青年がいつた。もう一時に近い。二人とも夢中で気がつかなかつたが、シンと静まりかえつたこのアパートでは、わたしの荒い呼吸や、高岡青年の喘ぐ声が隣室や階下の住人に聞こえるかも知れないのだ。

わたしは立ち上がつてテレビのスイッチを入れる。深夜映画劇場がはじまつていた。ボリュームをしぼつてから、私はすつかり汗ばんだYシャツやアンダーシャツを脱ぐ。ブリーフ一枚になつて再び青年の身体の上へおおいかぶさる。まぶしいのか、右腕をマブタの上へあてて上半身ハダカのまま横たわつていた青年は、わたしの重みが青年の硬直した中心部を圧迫した時ウッとうめいた。若さを象徴するかのようにこの上もなく硬直した青年の男性はわたしのいく分イレクトした軟かいソレと重なり合い、ブリームとズボンを通して電流のような快感を通わせ合つた。

青年はマブタを覆つた腕をとらない。わたしは顔でその手を払いのけようとする。青年は腕に力を入れてわたしに顔をみられまいとする。

「どうしたね。いまになつてはずかしいのかね。何してるんだい男のクセに。処女でもあるまいし。」私がこういうと青年はハジかれたように腕をはずし、充血したギラギラした目でわたしをにらんだ。（相当コーフンしているな）私はこう感じるがはやいか、ガバッと青年の口をわれとわが唇でふさいた。歯と歯がふれた。それはあまりにも激しいベーゼであつた。青年の舌はブ厚く一個の軟体動物のように私の口中をさまよつた。わたしの強い吸引はその軟体動物を青年からもぎとる程のすさまじさで続いた。青年は苦痛にうなつた。十分も続いたであろうか。それは長い長いそしてはげしいベーゼであつた。わたしが唇をはなし、骨も折れよとばかり抱きしめていた青年の身体からはなれた時、かの高岡青年は両手を上へあげ虚空をつかむような半裸の姿で、ハーレがみえるまで下がつたズボンの前をかたく隆起させたまゝ、片足を曲げ、白い腹部をあらい呼吸で波うたせ、アンパンを思わせるようなカッコのよいヘソをひろげたり縮めたりしてあえいでいた。ふとみると青年の唇のわきには血が

にじんでいた。私も手の甲で自分の唇をこする。やはりうすく血痕がついた。はげしいベーゼで青年の口中が少しきれたのであろう。
しばらくして青年は目をあける。「スゴイわあ」この一言を発して再び目を閉じ、青年はクルリと背をむけて顔を伏せた。ピッチリと尻にフイットしたズボンは青年の小さいながらもボリユームのある二つの丘をより一そう魅力的にみせた。夏服のうすい衣地の下には、ビキニ型のブリーフがはつきりとうつつて見える。それをみつめるわたしは、自分自身がみるみるうちにエキサイトしていくのをどうすることもできなかつた。バンドを使用していない最新型の青年のズボンは簡単にはずせた。ライトブルーの目もあやなビキニ型ブリーフを腰の上からめくると、そこには白くキメこまかいすべすべした肉感的な青年のヒップがあつた。怒脹したわたしの男性は性気な動作で青年のヒップへ埋ボッしていつた。
わたしは感きわまつていた。この年になるまで、いま現在味わつている快感を決して知ることはなかつた。この快感がいつまでも続くことを願つた。何というすばらしさであろう。目くるめく快感とでもいおうか。身体の中心から足の先まで、わたしの身体はひとつのリズムに統一され、コロラチユラ・ソプラノの調べに似たふるえに陶酔していつた。
青年も頭をあげ、わたしの動きにつれてうめく、いやが上にも激しくなる青年の息づかいは、一そうわたしの快感に拍車をかける。その時、わたしは脳裏に日蝕の際のコロナに似た光をみた。その先がどんどんと輝やきを増すにつれてわたしは絶頂に近ずいていつた。
二人はしばらくそのまゝ動かなかつた。テレビの深夜劇場の声も虚ろな頭にはことばとなつて入つてこなかつた。いつの間にか降つてきた雨が、トタンのひさしをポツンポツン叩いていた。
静かに立ちあがつて私はタオルをとり、二人のからだをきれいに拭いた。押入れからフトンを出して敷く。清潔なシーツは青年の性格をあらわしているようであつた。陽に干したばかりらしい敷きブトンは、フワフワとして踏む足がめり込むように感じられた。すつかり放心しきつつた青年をフトンにいざない全裸の身体にタオルケットを軽くかけてやつてから、私はやはり全裸のまゝであぐらを組み、青年が無造作に畳になげ出したゲルベゾルテの箱から一本とり出し、これも青年のロンソンで火をつけ、深々と煙を吸いこんだ。(すばらしい肉体、すばら

しいテクニックだ。こんな青年がこの大阪にいたとは、そして昨日偶然に入つたY理容館でわたしがこの青年に会えたとは。何という幸運だろうか。）こう考えながらわたしは、昨日北浜のY理容館を訪れてからの出来事をもう一度思いかえしていた。

たしかに一目みた時スバラシイと思つた。美しいヒトミであつた。しかし、その少年のあやし気な手のうごき。意味あり気な視線、それにも増して決定的な要因はシャンプーの際に私にカラダを寄せてきて少年の肌間の感触であつたのだ。

電話での呼び出しにすぐ応じた少年。そして実際は二十一才の青年であつたおどろき。右手首のいれ墨の跡。キタとミナミのゲイバーを知つていて案内してくれた青年。初めて会つたわたしをすぐ自分の部屋に連れてきた大胆さ。それよりもわたしをおどろかせたのはタクシーの中でわたしにフエラチオをする青年のはげしさだつた。

そして、いましがたの目くるめく陶酔感。わたしは、あまりにもトントンと進んできたこの青年との行動に一抹の不安を覚えてきたのだつた。たしかにあまりにもうまくいきすぎている。まるで小説のようだ。「事実は小説より奇なり」ということを信じぬわけでもないが、それにしても、あまりに順調でありすぎる。快い疲れでボーッとした頭の中にポッンと生じた疑念が、水の輪のようにだんだんと拡がつていつた。

タバコを吸い終つて、私はあらためて部屋の中を見まわした。何の飾り気もない部屋にひとつ、大きな状差しがあつた。中には封書がギッシリつまつている。私は青年の寝息をうかがいつゝそつと立つて五・六通の封書を抜き出した。

青年は一ペンに酔いがまわつたらしく、軽いいびきをかいて熟睡している様子。私はそつと封書の裏書きを見る。東京、仙台、広島、福岡、鹿児島、みな遠くからの手紙で、差し出し人はすべて男性。私は東京の津山某なる裏書きの手紙を読み出した。

ぜんりやく、ずいぶん、てがみがこないのでしんぱいしていいます。しけんのけつかはどうですか　兄さんは洋ちやんがぶじに高校をそつぎようして一日もはやく東京へきてくれるのを心からまつています。洋ちやんがいまも、ひどいおばさんにいじめられているのではないかと兄さんはしんぱいでしんぱいでならないのです。すられた月きゆうはやはり出てこなかつたのでしようね。ま

つたく洋ちゃんのような夜学生からスルなんてひどいヤツです。これからはゼッタイにカバンになんかいれてはいけませんよ。かならずみにつけていなさい。それと、おばさんにぜんぶわたすことはないとおもいます。いくら洋ちゃんをそだててくれたおばさんだつて洋ちゃんの月きゆうをぜんぶとりあげるのはひどいとおもいます。兄さんもできるだけセッヤクして、洋ちゃんにおくりますでもせん月おくつたぶんでちよ金がスッカリなくなつてしまつたので、とうぶんおくれないかもしれないけどガマンしてね。それにしてもにくらしいスリだねえ、まつたく…………」。

このような調子でカナ釘流のタドタドしいが真心のあふれた文章が続いていた。「夜学生」とか「かならずみにつけていなさい」などという用語から察するに四十代位でもあろうか。字もあまり知らない男らしいが、その行間には、はるか大阪のまだ会うこともない（？）弟を思う情があふれているように私には思われた。（それにしても夜学生とはおかしいな。高岡青年はもう高校はとつくに卒業しているハズなのに。それにおばさん云々と書いてあるのはどうもヘンだ。これはひよつとすると？）と思いながら私は仙台の木村某なる男からの手紙をひらいた。

洋一君、もう退院したかな、まさか、また入院費が足らんからくれとはいつてこんだろう。君を信じてパパは何度もお金を送つたのだが、どうやらパパの買いかぶりだつたのかも知れないね。盲腸がそんなに悪化するなどということも、洋一のような若い少年で大阪医大病院のような立派な設備の病院ならありえないことだと思われてきた。天涯孤独の洋一に同情したパパがお人善しだつたのだろうか。とに角一度会いたい。はじめての大阪ゆえ地理不案内だから、次の便りで詳しく地図を書いて送つてほしい。パパはやつぱり洋一を信じたいのだよ。…………。」

こゝまで読んで私はすべてを悟つた。この大胆な高岡洋一青年はたいへんな曲者であつたのだ。おそらく「風奇」あたりの読者欄で知つた遠隔地の同好の士に、あるいは夜間高校生といつわり、あるいは孤児になりすまして、善良な大人から金をまきあげているのであろう。これはたいへんなヤッと関わり合いをもつたわけだ。手首のいれ墨の跡も、今から思えばどうもヤクザな生活の名残りとも考えられる。わたしはゾクゾクッとした戦慄

をおぼえた。もう長居は無用であつた。残りの封筒をそこへなげ出したまゝ、ほうほうの態で身なりを整え、青年の寝息をうかがいつつ、そつと靴をはきドアへ手をかけた。その時、「バカな男だね。逃げなくてもええやんか。朝になつたら帰ればええやろう。」という不敵なことばが背後から投げかけられた。

一瞬ドキリとして、私は足がすくんだまゝ、開かないドアのノブをまわしつゞけていたのだつた。

（つゞく）

☆☆☆　　☆☆☆　　☆☆☆

酔つては醒め、さめては酔い行く男の生のその秘密の部屋の中で、極く自然に組み合わさる二人、三人とグループの友と語らい、楽しみたいと思う。どんな不満も、欲求も、喜びの元としていきましょう。ホモもサドもマゾも皆自然なものだ。但し、われわれの信頼すべき仲間の間だけである。

大阪市　二六四九番

生いたちの記

沖　白石

大阪は浪花とも浪華（そんな名前の小学校は今でもある）とも申すべき今は昔大阪が未だ東西南北に区分されていた時代である。

今でこそ映画にテレビに船場のド根性、善い意味で大阪商人の魂ともいえる船場といふ名称より受けるその響！には、郷愁がただよう。それは中年以上の人でないと一寸理解に苦しむであろうと思うが如何。

その四区の内、東区を主として船場という。

南区には島の内がある。北区に代表される天満という言葉より受けるニュアンスには船場育ちの人は一目も二目も下に見ている。私が小さかつた時、行儀が悪いと天満の子かといわれた位である。今は大阪の地図を開けて見ると北区でも天満地区は大阪のド真中で通つているがとかく船場育ちという事が自負心？となつていた。

余談だがその当時は大阪商人の生活はまことにつつましいものであつた。例えば、乗物で自分の家へ帰る時でも四ツ角で車を止めてそこから我が家へは歩いて帰る・・

等、食生活に於ても同じ事がいえる。私の経験を皆んながそうであるとは断じ難きも、昼めしに一品魚肉類が出る丈けで、朝夕は漬物である。だから味噌漬とか洋食等は正月とかお祭位であつた事を記憶している（註　味噌漬とは魚類を味噌漬けにしたもの）
それも料理は殆んど母の手料理であつた（洋食丈けは専門家より取よせる（特定の和食も）。

　こんな事があつた私達兄弟が（委しくは後記）二月の半ば頃郊外より帰路につく頃、夕方より少しおそくなり肌寒さにうどん屋へ行つた事があつた。私達兄弟は家庭では外部の専門家より食べ物を取り寄せる時は必ずでんわで注文したり、私は父の夕餉のおばん菜を近所の小料理屋へ使い走りした事は度々であつた。

　さて、うどん屋等に入つた事のない私達兄弟は壁にぶら下つている色々の食べ物から一番おいしそうなものを考えて「小田巻蒸し」とあるのに決めた。寒いので是れが一番暖かくなるだろうと思つた。うどんの鉢で中味が分る仕組になつていて此の小田巻蒸しは一番美しい入れ物で普通は蓋等ないのにチャンと蓋もついてある。蓋を開けて兄弟達は顔を見合せて「なんだ巻（マキ）ではないかと大笑いした。（小田巻蒸しを省略して唯巻（マキ）と呼んでいた事を初めて知つた）も一度兄弟達は大笑いした。こんな事許りいつているとキリがないので本論に入る。

　私は姉三人と妹二人の中間に存在する唯一人の男の子であつた。今でも君は小さい時は大切に育てられた・・・とよく言われるが私にはそんな記憶はない。

　大阪の今橋といえばつるや（今の当主が私の同級生といつても組が違うけれ共）とか灘萬とか一げんでは入れない料理屋がある。今はビルが建ち昔のおもかげは鴻池家位。そこに鶴が飼つてあつた、終戦前までたしかあつたと思う。それも今は半分が自動車の駐車場に変貌して残りの家も中味は変つている　その今橋の丼池の角に受珠幼稚園がある　今から思えば私は人間嫌いだつたのだろう・・園長さんに抱きかかえられ乍ら泣きわめき、園長さん（婦人）の顔をかきむしつた事を憶えている　多勢の園児達が私の足元へ寄つて来て見上げる様に視ていた。

　理髪屋へ散髪に行つても彼等の作業服の白さと仕事に使うピカピカ光る道具に何か嫌悪感を持つたのか、ここでもよく泣いて主人を困らしたらしい。

　ここで私は親の代りとして今考えることは女許りの男

の子唯一人だつたから大切に育て上げるつもりだつたろうが泣き虫はカンが高いのでおキユウが効果があるだろうと思つたらしい。

或る時、泣き叫ぶ私をつかまえて母親の両股の間に頭を挟まれて背中へヤイト（おキユウのこと）をすえられた。姉や妹がみている目前であつた。

当時の風習として子供がイタズラするとヤイトをすえる事と、お巡りさんが来る事とを子供達におとなしくする予防線としてよく利用したものである。私の母親も只それを実行したに過ぎない。

今にして思えば是れが私の終生忘れられぬ精神の汚点となつた事は否めない。

事ある毎に背中のヤイトの跡を指摘された女許りの兄弟であつたが、私は物心ついてから段々と卑屈になつて行つた。即ち人間嫌いになつて行つたらしい。

小学校へは矢張り同じ今橋の御堂筋西寄りにある愛日小学校へ通つた。

当時の小学校は教育勅語中心であつたから校長は天皇陛下の次の偉い人の様に思われた。

映画とは言わない活動写真である。私は小学校四年生の時、二人の友人が出来た。一人は伏見町の太物問屋の三男坊（今でいう繊維問屋）A君。も一人は当時の財閥の御曹子B君。此の二人の住宅が今の日本銀行の裏手にあつて私が遊びに行くと、遊んでいた玩具を私が後片づけをするのをB君の母や祖母達がほめてくれた。

初めてA君と活動真写を見に行つた翌日、何くわぬ顔で登校すると同級生から散々イタメつけられた。此の時A君には誰れも何にもいわなかつた。その筈である、A君は秀才型である。小学校をおえて北野中学校へ入学すると特待生になつた事を風の便りで聞いた。小学校在学中は誰からも一目おかれていた。

A君の事を少し委しく記すとA君の兄弟は男許りの六人兄弟であつた。環境というのか男許りだのにA君は女の様であつた。容貌も色白で耳の上の方を女の子がする様に丸坊主の髪の毛を上にあげる格好をする「クセ」がある。言葉使いも女の子の様であつた。

B君は、A君に輪をかけた様な女の子の言葉使いであつた。

こうして五年生迄親友というより友人として共に遊び暮したが六年生になると、中学へ進級とせないものとを学校が区別して授業する事になり、A君、B君も進学組に入つたのどそれからは遊ばなくなつた。同じ伏見町に骨

董屋の三男坊、戸田君といえる「ヤンチヤ」坊主と不思議と遊んだというよりよく誘われて、今はおもかげもない堺の海岸でボートに乗つた事もあつた。戸田君は、ボートを横にユサブルと私が情けない顔をするのに興を持つたのが随分と困つた事があつた・・・。

それにつけて想い出すのは、私は中学校へは進学する代りに尋常高等小学校とて二年間の学級制度のある今の東中学の前身東尋常高等小学校へ入学した。

私は小学校六年の時、A君B君とも生木をさかれる思いをした。戸田君や他の腕白小僧達に取りまかれて散々ひどい目に会つた。

或る日、その腕白小僧達の一人に組み敷かれた時である。あお向けにされた私の顔の上へ馬乗りとなつた彼の両太腿に挾まれ乍ら股間から発散する少年らしい体臭を心ゆく許り私は味わつた。不思議に男の体臭を直感したがその時は唯それ丈けで何もなく過ぎ去つた。

話は元へ戻るが母親の愛情の発露か知らないが私は困つた時があつた。それは小学校一年生として前記愛日小学校へ入学当時の事である・・・。当時は軍国主義はなやかな時代で今の大手前中学校の前身偕行社といえば軍人の卵が入学するか、余程誘福な家庭の子弟でなくば入学出来なかつた。

当時、市の小学校でも洋服と着物と半々位の生徒達の服装であるが、偕行社は何もかも別あつらえであり、その洋服を専属的に引受けている山際という学生服専門店が私の家の近所にあつた。母は何を思つたか同じ服を買つた。それは服の上着とズボンの端しばしの要所要所を細いが赤い紐の様なものがついていて、靴下も茶と黒の三センチ位宛段々になつたもの、学用品を入れるのは私達一般は皆風呂敷包だつたが、背嚢の外側は馬の毛のついたランドセルだつた。ランドセル？だけはどう思つたか、母は買わなかつたが、洋服は一般は偕行社でも小倉服といつて純綿仕立であつて時々ラシヤ製を着せる家庭もあるが、是れは余程恵まれた家庭か親の見栄の延長かどちらかである。私は偕行社のラシヤ製を着せられ？て登校した。入学式もすんで今日から授業が始まる日、校庭で先生の指導で二列縦隊に並び、さて休めの号令で休んでいる時、私の廻りの生徒が私の服装の品定めをし始めたには困つた。格好のよい服だとほめてくれたが後が悪かつた。ヤレ赤い線があるの、靴下も段だらで赤いと多勢でヒヤカされた。翌日から靴下丈け母にネダッテ皆んなと同じ黒にした。

長じて東尋常高等小学校を終える頃、私は十六才を迎えた。その頃市内を走る交通機関は殆んど自転車が利用された。私も父の事業を手伝う事に余儀なくされた形となつた。それもゴク自然の内にそうなつた。今も同じ人手不足で私は東尋常高等小学校へ通つている時分から学校から帰ると市内の配達をやらされた。

或る日、配達先で小僧扱いされて家へ帰るなり口惜しく泣き出した。

或る時は、丁稚車に荷物を積んで配達の帰りの空車を引張らず逆に押して歩いたので車の先きの鉄板が通行の男の人の足を引かけてヒドク叱られた事もあつた。

先程の自転車の事だが私も学校を卒業するといよいよ本腰で父の事業に従事するのである誰がきめたか「坊んぼん、自転車のケイコをしはりまつか」当時、私の一番上の姉が結婚する相手の男性は永年父の事業に従事している前途ある青年Y氏がいて、仕事上は元より父母が旅行する時は何時もY氏が留守番を引受けていた。それ程信頼のあるY氏を長姉のムコに内定しているらしい（余談だがY氏は仕事熱心で当時同業者間に東京、大阪と屈指の職人の一人としてショク目されていたおまけに私が見てもよい男振りであつて何んでもよく知つていた博識である。

そのY氏にすゝめられて天王寺公園で他の若い職人や店員達数人と連れ立つて自転車の携古をしに行つた。始めからうまく乗れないのは分り切つた事である。何度も失敗した。その度に後の方で皆大声で笑う声が私の耳に入つた。私は心の中で斯う叫んだ、こんな事ならもう一生自転車に乗るまいと・・・・と。

も一ツの心は、皆んなから罵倒されるのが口惜しかつた　。今にして思えば私は人間嫌いでしかなかつたのだと思う。失敗しても皆んなと一緒に笑えばたしかにその場の空気もナゴヤカになつたであろうに・・・おそらく私の顔は情けない而も反パツ的無頂面をしていたに違いない。

その時、私の脳裡をサッとかすめた想出が甦つて来た。それは未だ小学校四年生頃だつた。私は学校から帰つても外で遊ばず妹達と一緒に遊んでいた・・・。フト表の店の間を通して街頭を見るとはなしに見ると、真夏の太陽がサンサンと道路をハネ返して眼をイル様であつた。今しがた納品に来た小店員十五、六才位の少年が自転車に乗つて帰るべく片足をペタルをふんでもう一方の片足をサツとサドルを越えて一方のペタルをふむべく片足を

大きく開げた時、真白なパンツが少年らしい太腿を包んで美しい二本の足がハダケた仕事着の前が開いて見えたのをうつとりと眺めた。あの時の少年の美しい顔にも増して二本の足の根本にあるものに得もゆわれぬ快感を憶えた。ー嫌いな自転車である筈なのにその自転車を見て私はそんな事の記憶に愉悦感を想い起させた。

私の家庭は男といえば父一人、後は母と姉と妹である。二番目の姉は父の事業を手伝つている。近所の人も父自身も此の児が男であつたら・・とよく述懐していた。よく間に合う、私からいうのも変だが男勝りでシッカリ者で然も利発であつた。長姉は花嫁修業に専念していて父も母もそれを楽しみにしているらしい。

私が学校から帰つてみると、又新らしい着物を縫つている、私は直感した。又此の着物が出来たら芝居見物だーーと。それ程着物を作る度に芝居を父に連れられてよく行つたものだつた。因みに、一寸話はそれるが芸事について私の家族についていえる事は、長姉は義太夫の三味線を文楽の師匠に手ほどきをして貰つている。二番目と妹二人は父の事業関係の人の世話で、姉は長唄の三味線を、妹二人は踊りを習つていた。三味線の姉二人は、さ程の事もないが、それでも私が風邪を引いて寝ている枕元で娘道成寺のはなやかな長唄を稽古していたのが未だ耳元に残り、妹二人が相舞といつて二人一緒に踊れる例えば千本桜道行の静御前と忠信や滝夜叉姫の滝夜叉と武士（名前は一寸忘れ失礼）。毎年一回は、芝居小屋を借り切つて舞踊会には出演するし、その時は父は招待するお客様への贈物を色々と考えた—。父は歌沢を芝何んとかいう師匠に通つている・・・。私は？　私は一時謡を稽古したが長続きしなかつた。ものにならず終いだつた—。唯母は何んにも芸事には手を出さず、唯家族達の趣味を側から見て喜んでいる風であつた。

妹達の舞踊会に知人から貰つた花輪を私が芝居小屋へ届ける役目をした事がある。人力車（今程自動車が発達していない。大抵は人力車で用が足せた）に花輪にうずもれる様にして乗つて街を走つていると道行く人々の視線が皆私に集まつてくるのを車上から見降して優越感にひたつていたものだつた。

そんな時代に私にも異性に対する何んとなしに見惚れる時機があつた。—　それも妹達と一緒に習つている娘さんの中に男らしい少女に思慕の情？を寄せた—　それは丁度急行列車が通過する駅に立つている位のホンの僅かの時機であつて、又元の人間嫌いに戻つていつた。

こんな家庭内で私の精神状態が順調に進むとは私自身知る由もなかつた。

事の序にこんな事があつた。私が幼稚園に入る前頃だつた。私の家で冬期寝る時は家族全部が一ッ櫓のコタツを囲んで休むのである。夜中に私は布団の中にもぐり込んで父の垂れ下つたシンボルをサワッタ事が度々あつた。別に興味があつたでもないのに私の体は自然に父の股間にもぐり込みに行くのだつた・・・。

或る夏の昼下り、その日は店が休みで職人達は皆遊びに行て職人達の部屋には唯一人の青年が昼寝をしていた。その部屋に入つて彼の股間からはみ出しているアノヤワラカイものをまさぐつた。今にして想えば、父もその青年も知つていて知らぬ振りをしていたに違いない。

私は小さい時から肌着も女の子と同じものを身につけていた。ある年の月見を父が住吉でするといつて私を連れてくれた時は、長い袂のある着物であつた。

だから後年、思春期に入る年頃になつて猿又とかパンツだとか、まして褌等男の着るもので、私が身につけるものではないと錯覚していたに違いない。そんな下着の名前さえ口に出すのが恥かしかつた。

こんな精神状態の内にも、私は私なりに母の感化が不思議と救いになつていた。

それは、私の家は真宗で何んでも真宗のことを「もんともの知らず」・・・といつて真宗に東と西があるが、私の家はお西さんといつて京都の西本願寺派に属している末寺願生寺であつた。

小学校四年生頃、西本願寺で法主から「おかみそり」を頂いて法名を受けた。母に連れられて西本願寺の大きな本堂でおそらく千名に近い人々に混つてゴッタ返す人波にのまれた本堂も、さすが人又人で小さな私は只母にはぐれまいとして騒然たる中で法主からコツンとそれも微かな音を立てゝ次々と歩いて行く法主の白い足袋の消えて行くのを、カミソリの頭にのこる軽い皮膚の感じをおとなしく受けている私だつた。母は帰る道々「アンタも是れで御仏の御弟子になつたんやで・・・何時死んでも大丈夫極楽へ行けるんや・・・」。今考えても想像もつかない事を小学四年生の私に喋つて喜んでいる母の姿を見ては、私はもう大人になつた様な錯覚に陥入るのだつた。

母は真宗の説教がある度に私を連れて行つた。和歌山迄行つた事を憶えている。母はお寺関係のお友達が沢山にあるらしくそれにふさわしい色々の小道具を揃えた。

母の煙草を吸うのを見たのもその時だつた。こうゆう場所へは中年すぎの男女許りであり、私も段々と年寄りの風習に染り、少年らしい発刺さがない事が学校での同級生から敬遠される事を知らず、何時もホントの友達が出来ずに卒業して終つた。

小学校へ通う道順は、自分なりにきめていて、或るキリスト教会の前を往復通つた。その教会の表に絵看板が何時も私の脳裡を刺激していた。「酒の害毒」と大きな文字でその下に門から多勢の人々が列んで出てくる図である。言う迄もなく酒乱に妻や子の困つている姿を描いてある。私が酒を呑まなくなつたのも此の辺に遠因があつたのではなかろうか。

一方では人間嫌いであり乍ら一方では母に連られて大人達に混つて行動を共にする機会の多い少年期をすごした私は、誰れが見ても少年らしい姿を見出せなかつたに違いない。

こうして尋常小学校を卒業、十六才になつた私はいよいよ社会への一歩ふみ入れた。

十七才になつた私は一人で外出した。今日は春の彼岸の中日、今の春分の日である。店は休み。私の足は不知不知の内に天王寺の四天王寺の参詣人に混つて天王寺へと進んでいた。習慣か惰性か。

私は此の年頃には早や一ツの固定した或る種の感念が私の心を支配していた。

少年の開花・・・といえば聞えはよいが、私の人間嫌いの反動的表われが私をしてホモの性格を序々に現わしつつあつた。それが行動に出る迄には未だ時日が必要であつた。当時の世相はホモを受入れる何ものもなかつたから　　尤もあるにはあつたであろうけれど十七才の私には知る由もなかつた。

そんな訳でもあるまいが、私の生い立ちが私をして町の中に見るものの特殊な事に興味を持ち始めつつあつた。それは人にも言えない思春期の悩みであり、町でそれを見るのが一番私の心の安らぎを得る時であつた。

そのキッカケを得たのは幾つもあつたが、第一に言えることは芝居ずきになつたこと。

私の通つていた愛日小学校から私の家へ帰る時、一寸足を延ばせば氏神様である御霊神社の境内に御霊文楽の小屋があつた。その小屋の横手に小さな出入口があつてそこから舞台の横が見える。一度小屋に入つて見たいと思い乍ら時々学校の帰りに何んとなくのぞいて帰るのであつた。

同じ境内に寄席の定席がある。父に連られて行つた時の事である。落語その他の事は忘れたが、何んでも表の看板によると中華民国人の身体運動、陳〇〇外、と他の落語等と共に書き竝んである。さて大人の前芸?があつていよいよ少年二人の身体運動である。

父が後で感心した様に「あれだけよく身体（からだ）が反り返れたものだ。二ツ折といゝたいが、アレでは三ツ折になつている・・・・」と。

私の心の内よりムクムクと何や訳の分らぬ感情とも感激とも言い様のないものが体内を圧した。大きなショックを受けた。

想い出すさえ私の幼ない時のアノ「ヤイト」をすえられた時の事がマザマザと頭に浮んで来た。それは母親の愛情として受け入れる前に泣いている私を押えつけて厭がる私をシツカリと強く両股の間に顔をうずめられ身動きも出来ない。手足も父親がシツカリと押えるというより押えつけられ、その上姉や妹が可哀そうに助けて上げたい・・・・と口々にザワメク大仰にいえば親兄弟の「衆人監視」の中で厭がる私の背中に「モグサ」を乗せて何分間の苦しみを味わわされた。私の心の少年らしさは此の時からけし飛んでしまつたのか　―又は幼ない乍ら家族達から無残な仕打ちをされた如き錯覚におち入つたのか　男である父のその時のおもかげは今に憶えはないが、女である母親や哀願している姉や妹の顔を見るのも厭である許りか、女というものに反感を持つ様になつたのも此の時からであろう。

丁度、中華民国人の少年の身体運動を色々形の変つた所作をする度に附添いの大人が物々しくその前ぶれの様に口上と共に自分には出来ない素振りもお可笑そうに見せては観客を笑わし乍ら次々と少年に曲芸をさせる。二ツ折りに曲つた身体の顔の表情は無理に笑を作つている様に見える。芸が一ツ終る度に客席から拍手が送られる。

くどい様なれど私の幼ない時の心の痛手と、今観ている少年の身体運動の有様とは偶然一致する所を見い出した。

想えば永い間私が心の奥底に秘めていた魂のより所を現在の此の年に成つて初めてハツキリと言い切る事が出来た。

何んと私の頭脳の鈍い働きであることも今こそ大言豪語して私は此の二ツの事実を公言出来る。

是れが私をしてホモの助成ともなり、益々少年を愛する様になつたとも。

憧れている少年についてはココは生い立ちの記であるから割愛して稿を改めて書き綴りたい。

追記

私の生いたちの記の追憶の記

私は大阪市東区平野町三丁目に生れました。それで氏神様は今に現存している府社御霊神社です。氏神様の御霊神社の夏祭は毎年七月十七日です。丁度京都の祇園祭と同じ日です。

それについて忘れ得ぬ想出話があります。

宵宮の十六日御霊神社へ一人で遊んでいると店の使いのものが（私が丁度小学校四年生）

「ぼんぼん・・・・」

と肩をたゝいて家へ帰る様にいいました。（こんな事は珍らしい記憶として残つています）何んだろうと思つて帰ると、父と母が黙つて私を連れて京都の祇園祭を見に行つたのです。その日は大阪へ帰らず京都の旅館へ泊りました。何んでも加茂川の畔りでした。朝起きて庭下駄をはいてその加茂川の水で顔を洗いました。その水の冷たいこと。真夏とはいえさすが京都は朝はヒンヤリとしていました。その川の冷たさは今も京都の加茂川を見る度に想い出させます。いよいよ本祭です。それよりも宵宮を夕方より父母に連られて烏丸通りを通つている時、偶然前に申しました私の友人の一人、太物問屋のA君が鉾のある家の二階から下を見下している目と合いました。今なら交渉してそこでお祭を見る様にすれば、父母に対しても都合がよいのに私は唯黙つて目と目を合せる丈けでした。私という人間はそんな意気地がありませんでした。

次にその御霊神社について前に申しました御霊文楽の事ですが、私が小学時代より文楽に興味を持つ様になつたのは家庭の環境もさる事乍ら当時文楽は（今の様に年に何回より大阪では興行しませんが）毎月興行していました。（余談ですが朝の八時頃から晩はたしか七時頃にハネたと思います。）

それで毎月の芸題を街へチンドン屋よろしくふれ廻つたものです。（屋台を組んで或る場所へ来ると幔幕を開けて人形を操り乍ら次に興行する芸題を披露します。）丁度私の家を半丁程行つた所で止まります。そこが平野町で三味線の音がすると私の耳に入る時は何時もその人形振りと三味線の音に聞き入つていました。その度に一度小屋に入つて見たいと思つていました。

一度御霊文楽が焼けました。その飛火が数丁離れた同じ平野町で私の近所にあるつるやに肩を竝べる位の料理屋へ移りました。幸い小火ですみましたが随分騒々しかつたです。

文楽は直ぐ再興しまして「コケラ落し」の興行した時、これも京都行と同じ様に兄弟六人の内から私が選ばれて観る事が出来ました。でも一番上の姉は父母に連られて観に行つている事は勿論です。（彼女は文楽の師匠に三味線を習つているから）（当時は今の様に椅子ではなく桝（マス）といつて座席です。一マスに四人詰です。私一人位余計に入つても差支えないらしかつたのでしよう）

（余計な事申しますが、何かの場合、必ず文楽では三番捜を出します。その時「コケラ落し」だつたので三番捜がありました。私は此の場面を観て到々文楽狂になつてしまいました。太夫の語りより三味線に魅力を持つていましたから）

次に船場というのは何んでも西横堀川と東横堀川の間と南北は今は自動車の駐車場になつている長堀川と、北は公会堂の前の川筋との間のその場所を船場と呼んでいました。

（島の内は長堀川を境にしてその名から来るニユアンスはまことに色気がありました。反対に船場はつつましい大阪商人の発祥？の地として島の内とは対照的でした。）

私はそうした船場で徴兵検査の前年迄住んでいました。

私はおそらく終生自分の生家で暮すものと思つていました。　母が私が十四才の時他界してから家庭の運命に変化があり、東京の大震災も地下鉄もラジオも知らず死んで逝つた母が恋しくてたまりませんでした。それから或る事情のもとに船場とは別れる日が来ました。母はなく男は父だけ、あとは兄弟といつても姉二人は嫁いで妹だけでは何の相談も出来ず、私の小さな魂はよる所を失ない春雨のシトシトと降る晩に死を覚悟して家出をしました。新らしい家に移つても同じ大阪市内であり乍ら船場という懐しい名を捨てねばならない土地柄と頼りにする親類知人もない私は一人心を痛めて思い余つた軽挙を実行したものです。幸いそれは不発に終りました。

三ッ子の魂百まで

という古諺を私は幼少の頃よりよく耳にしました。私が幼少の時前に申しました「ヤイト」をすえられた件ですが、何十年も経つた今日ヤットそれが私の人生を如何に

左右したかを知りました。前にも申しました通り、中国人の少年の身体運動と「ヤイト」と、それから私の特殊な精神（是れは申さずともお分りと思う）と此の三ツが重なつて長い年月心のモヤモヤが何んによつて満たされ得るか、ハッキリと分らずに唯街を彷徨していました。

もう少し駄弁をお許し下さい。

私が十七才の時、前に申しましたが春の彼岸の境内に彼岸目あてのいろいろの小屋掛の催しの中に軽業（かるわざ）の絵看板に私の好みに会うものを見出して生れて始めてその小屋に入りました。そしてその絵看板通り少年の見事な芸に魅入られて終いました。それからというものは街の空地で（今は見るよすがもない）西にあらば西へ東にあらばそれへ走り、時には少年の芸を観乍らとうとう我慢出来なくなつて下着を濡らした事もありました——又境内に観音経を唱えて踊つている三人の少年を永い間立つて観て日の暮れるのを忘れた事もありました。永い間私は一人ぼつちでした。心の宿がなかつたのでした。それは特殊な精神の持主だからだつたでしよう。

干天に慈雨

ちと大げさな表現ですがお許し下さい。

はからずも同好会を知つてからしばしば会員方と事務所でお会してから会長さんの確固たる御信念による会員方の行動を見聞して日尚浅いにかゝわかない私で然も「カン」のにぶいのに、今迄申上げた事を公言する勇気が出て？来ましたので、一挙にこんな事を書き綴る気になりました。私の様な浅い経験者はおられないと思いましたが、私も今では私一人ポッチではない。此の喜びを自分一人の胸に収められず、この拙ない文章を以て私の喜びに代えたいと思いあえて筆にはあらでペンを走らせました。

最後迄お読み下さいまして有難う御座います。——

そして意味の分らない所や私の考えの思い過しや、至らぬ所多々ある筈です。どうぞ御遠慮なく御導き下さる事を切にお願いしたいです。

ホントにありがとう。

会員通信

今週の週刊文春を拝見致しました。こうした性傾の者の為に御尽力頂いているのに労のみ多くして報いの少ない困難な道である事を知りました。しかし我々の為に今後共に尽力下さいます様にお願い申上げます。以下略

石川県　二五六一生　四月十九日付

前略、先生にはご壮建にて会の為に日夜御精励のよし、私共にとつて何より嬉しく思います。苦しい会の運営だそうで申訳ありません。さて、先日は久し振りに先生の御書面に接し有難度うございます。いつも乍らの心使い御礼のことばもありません。　以下略

鹿児島県　三三二四生　四月十九日付

前略　信ずると言う心の中に小生迄も深い情の中に入れて下さるのではと一人愚考しながらも、いやうぬぼれ乍ら先生の御好情に接したゞ感謝のみと言うところです。以下略。

福岡県　二五四六生　四月二十四日付

貴兄の信条一つに生きる強さに威敬の念すらいだきました。その善意がひたひたと胸につたわるようで感謝の念で一ぱいです。以下略

島根県　二六七〇生　六月二十三日付

先日は突然お伺いし入会することが出来よろこんでおります。会則や会誌を読んで主宰者の考え方もよくわかりました。自分自身でも持てあますようなことがらで困惑しておりますが、良い相談相手になつて欲しいと思います。

山口県　二六四七生　六月三十日付

お元気で斯道の者達の御指導下さる事を御苦労様に存じます。

滋賀県　二〇五三生　七月九日付

地方ニュース

長崎県　会員生

十四、十五日は長崎のお盆でした。長崎の場合はちょつと変わつていて十五日の夜に精霊流しがありました。精霊流しというのは、長さ六～十メートルの船を初盆の家庭が作り、それを家族や親類の者が港まで運んでいくものです。今年は約二千隻の船がでて、見物人は二十五万人ぐらいあつたようです。僕も町内の親類の家の船をかつぎました。以前はみこしのように船をかつぐものが多かつたのですが、市内をねり歩いて港まで約二キロメートルあるので、だんだん船の下に車をつけて、押していくのがふえてきました。また普通の船の型をしたものばかりでなく、ロケットや竜、鳳凰など、工夫をこらしたのが見かけられるようになりました。精霊流しを見物する者は、耳にせんをして行かないと一日中耳が鳴つてたまりません。なぜかというと、精霊船を押す人達がわざと花火や爆竹を見物人のほうへ投げるからです。でもけつこう見物人もこのスリルを味わつているようです。しかし、けが人が毎年たえることがありません。十五日も一時過ぎまで爆竹とサイレンの音であふれていました。長くかいてきましたがどれで少しは長崎のお盆のことが分つていただけたと思います。

会員番号		氏名	
会費 1月末現在			